

泉大津市文化財調査報告13

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 5

1987・3

泉大津市教育委員会



泉大津市文化財調査報告13

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報5

1987・3

泉大津市教育委員会

例 言

1. 本調査概報は、泉大津市教育委員会が、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。
2. 本調査は、泉大津市が国庫補助事業及び、大阪府補助事業（総額4,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として、計画・実施したものである。
3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者 泉大津市教育委員会教育長 藤原勇三
調査担当者 泉大津市教育委員会社会教育課 坂口昌男
調査補助員 小原央子・藤原昭彦・大野育子・前田保代
松永加容（旧姓源氏）・岩崎勝也

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課（課長 鈴木実）
4. 本事業は、昭和61年度事業として、昭和61年4月1日に着手し、昭和62年3月31日に完了した。
5. 本書の作成は、坂口・藤原が執筆し、実測・トレース及び図版作成は、西田久美・前川昌子・坂口・藤原・小原・大野、遺物写真撮影は小倉勝が当たった。
6. 本書では、遺物実測図及び遺物写真に共通する番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

目 次

第1章 埋蔵文化財調査の状況	1
第2章 地理・歴史的環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 発掘調査報告	13
第1節 豊中遺跡	13
第2節 板原遺跡	21
第3節 人園遺跡	25
第4節 東雲遺跡	30
第5節 七ノ坪遺跡	45
第6節 虫取遺跡	48
第7節 穴師遺跡	50
第8節 池上・曾根遺跡	53
第9節 池浦遺跡	55
第10節 遺跡範囲外試掘調査	58
注	61
挿 図	
第1図 遺跡分布図	7
第2図 豊中遺跡調査地点図	13
第3図 豊中遺跡第1地点掘削位置図	14
第4図 豊中遺跡第1地点調査城断面図	15
第5図 豊中遺跡第2地点掘削位置図	16
第6図 豊中遺跡第2地点調査城断面図	16
第7図 豊中遺跡第3地点掘削位置図	17
第8図 豊中遺跡第3地点調査城断面図	18

第9図	豊中遺跡第3地点出土遺物	19
第10図	豊中遺跡第4地点掘削位置図	20
第11図	豊中遺跡第4地点調査坑断面図	20
第12図	板原遺跡調査地点図	21
第13図	板原遺跡第1地点掘削位置図	22
第14図	板原遺跡第1地点調査坑断面図	23
第15図	板原遺跡第2地点掘削位置図	23
第16図	板原遺跡第2地点調査坑断面図	24
第17図	板原遺跡第3地点掘削位置図	24
第18図	板原遺跡第3地点調査坑断面図	25
第19図	大園遺跡調査地点図	26
第20図	大園遺跡第1地点掘削位置図	27
第21図	大園遺跡第1地点調査坑断面図	27
第22図	大園遺跡第1地点出土遺物	28
第23図	大園遺跡第2地点掘削位置図	29
第24図	大園遺跡第2地点調査坑断面図	29
第25図	東雲遺跡調査地点図	30
第26図	東雲遺跡掘削位置図	31
第27図	東雲遺跡遺構図	33~34
第28図	東雲遺跡掘立柱建物	35
第29図	東雲遺跡河川状遺構断面図	36
第30図	東雲遺跡溝断面図	36
第31図	東雲遺跡出土遺物	43
第32図	七ノ坪遺跡調査地点図	46
第33図	七ノ坪遺跡掘削位置図	46
第34図	七ノ坪遺跡調査坑断面図	47
第35図	虫取遺跡調査地点図	48
第36図	虫取遺跡掘削位置図	49

第37図	虫取遺跡調査地断面図	50
第38図	穴師遺跡調査地点図	51
第39図	穴師遺跡掘削位置図	51
第40図	穴師遺跡調査地断面図	52
第41図	池上・曾根遺跡調査地点図	53
第42図	池上・曾根遺跡掘削位置図	54
第43図	池上・曾根遺跡調査地断面図	54
第44図	池浦遺跡調査地点図	55
第45図	池浦遺跡掘削位置図	56
第46図	池浦遺跡調査地断面図	57
第47図	遺跡範囲外試掘調査地点図	58
第48図	掘削位置図	59
第49図	調査地断面図	60

挿 表

表 1	遺物別届出件数	1
表 2	遺物別調査件数	2
表 3	昭和61年度調査一覧表	2
表 4	昭和60年度調査一覧表(追加)	5
表 5	ビット一覧表	37
表 6	遺物観察表	62

図 版

1	豊中遺跡第1地点調査地・第2地点調査地
2	豊中遺跡第3地点調査地・第3地点2号井戸
3	豊中遺跡第4地点調査地・板原遺跡第1地点調査地
4	板原遺跡第2地点調査地・第3地点調査地
5	大園遺跡第1地点調査地・第2地点調査地
6	東雲遺跡調査前・調査風景
7	東雲遺跡ビット掘り下げ前・ビット掘り下げ後

- 8.....東雲遺跡河川状遺構・掘立柱建物跡
- 9.....東雲遺跡河川状遺構内遺物出土状況・ヒット77遺物出土状況
- 10.....七ノ坪遺跡調査坑・虫取遺跡調査坑
- 11.....穴師遺跡調査坑・池上・曾根遺跡調査坑
- 12.....池浦遺跡調査坑・遺跡範囲外試掘調査坑
- 13.....豊中遺跡第3地点1号井戸枠・2号井戸枠
- 14.....東雲遺跡出土遺物

第1章 埋蔵文化財調査の状況

埋蔵文化財包蔵地（周知の遺跡）内において、土木工事等の工事を実施する場合「文化財保護法」の規定により、工事着手の60日前までに、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」もしくは、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知」の提出が義務づけられている。

又、発掘調査を実施する場合も、「埋蔵文化財発掘届」もしくは、「埋蔵文化財発掘通知」をやはり文化庁長官に提出しなければならない。本年度は、文化庁より上記書類の様式が全国的に統一され、必要事項を記入もしくは選択する等、簡便化されたが、当初は不慣れな為提出書類に不備な点が多々見られ混乱が生じた。

さて、昭和61年度における届出件数及び調査件数は、表1・2のとおりである。泉大津市内においては、市街地化が進む中、住宅建設が圧倒的に多く、とりわけ個人住宅が全体の42%を占めている。又、本年の傾向としてマンション等、共同住宅の建設がみられるようになった。次に、住宅に伴うガス管埋設工事が28%で、両者を合わせて全体の2/3以上となっており、昨年と同様の様子を呈している。これらの工事内容に応じて調査方法も、共同住宅工事を除いて住宅建設による掘削深度の浅い基礎工事や、ガス管埋設工事による狭小な掘削面積などから立会調査が多数を占める結果となっている。（表2）本年度も昨年と同様、発掘届出件数と調査件数との間に大

表1 遺跡別届出件数

遺跡名	件数	内 訳				
		住宅	ガス	工場・倉庫	店舗・事務所	その他
池上・曾根遺跡	15	7	4		2	2
豊中遺跡	24	9	9		5	1
虫取遺跡	12	7	2	2	1	
大園遺跡	5	1			3	1
板原遺跡	10	3	4	2	1	
池浦遺跡	7	5			2	
穴師遺跡	1	1				
七ノ坪遺跡	3		2	1		
古池遺跡	5	2	2		1	
東雲遺跡	3	1	1			1
計	85	36 (42%)	24 (28%)	5 (6%)	15 (18%)	5 (6%)

きな隔たりがみられ調査率は65%と依然として低い。調査の実地日・地番・遺跡名等は、表3に示しておく。但し、本書の編集の都合上、昭和61年2月28日までとなる。

表2 遺跡別調査件数

(昭和61年4月1日～昭和62年2月28日)

遺跡名	立会調査	発掘調査
池上・曾根遺跡	9	1
豊中遺跡	12	5
虫取遺跡	6	1
大園遺跡	1	2
板原遺跡	4	3
池浦遺跡	1	
穴師遺跡		1
古池遺跡	3	
七ノ坪遺跡	3	
池浦遺跡	2	
東雲遺跡		1
計	41	14

表3 昭和61年度調査一覧表

(昭和61年4月1日～昭和62年2月28日)

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考(調査番号)
4・3	北豊中町1丁目604-1	七ノ坪遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
4・18	豊中 668-2 669-2	穴師遺跡	発掘調査	住宅建設に先立つ調査で、遺構は認められず。須恵器片・土師器片出土。(8606)
4・18	北豊中町2丁目9-8	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
4・22	板原30	板原遺跡	発掘調査	盛土工事に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8607)
4・30	東豊中町1丁目70-3	豊中遺跡 (古池遺跡)	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
4・30	北豊中町3丁目974-1	豊中遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
4・30	北豊中町2丁目366-30	豊中遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
5・17	米広町1丁目328-11	大園遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
5・21	板原207	虫取遺跡	発掘調査	事務所・倉庫建設に先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片・瓦器片出土(8608)
5・21	森町2丁目21-13	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考(調査番号)
5・31	北豊中町2丁目1-26	七ノ坪遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
6・2	板原75-4,-6	板原遺跡	立会調査	住宅・倉庫建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
6・18	北豊中町2丁目982-5	豊中遺跡	発掘調査	店舗建設に先立つ調査で、遺構は認められず。(8609)
6・25	我孫子231-3	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
6・27	東豊中町1丁目4-1	豊中遺跡 (古池遺跡)	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
7・4	森町2丁目227-52	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
7・9	森町2丁目227-104	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
7・16	下条町246-4,-6	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
7・19	森町2丁目215-4	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
7・21 8・26	東豊町 65-2 66-3	東豊遺跡	発掘調査	共同住宅建設工事に先立つ調査で、古墳時代の掘立柱建物・溝等が検出された(SIN-2)
7・26	北豊中町2丁目12-10	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
7・31	北豊中町3丁目979-28	豊中遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
8・8	北豊中町1丁目5-40	七ノ坪遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
8・27	東豊中町1丁目10-11	豊中遺跡 (古池遺跡)	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
8・28	板原 66 67	板原遺跡	発掘調査	倉庫建設に先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片・須恵器片出土。(8610)
9・2	我孫子231-3	虫取遺跡	立会調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構・遺物等は認められず。
9・2	北豊中町2丁目9-18	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
9・5	東豊中町2丁目961 -32	豊中遺跡	発掘調査	事務所建設に先立つ調査で、遺構・遺物等は認められず。(8611)
9・22	北豊中町2丁目987 -12 -13	豊中遺跡	発掘調査	共同住宅建設に先立つ調査で、土製羽釜利用の井戸2基検出。(8612)
9・29 10・3	練井54-2	大岡遺跡	発掘調査	倉庫付事務所建設に先立つ調査で遺構は検出するに至らず。(OZ-2)

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考(調査番号)
10・16	板原 66 67	板原遺跡	立会調査	浄化槽埋設工事による掘削で、遺構・遺物等は認められず。
10・16	森町2丁目22-19	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・16	板原66	板原遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・18	千原町2丁目125 ⁻¹ ₋₃	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
10・21	板原78-1, -2	板原遺跡	発掘調査	共同住宅建設に先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片出土。(8613)
10・25	北豊中町2丁目380-25	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・25	北豊中町2丁目9-18	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
10・27	板原75-4	板原遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
11・4	北豊中町3丁目979-29	豊中遺跡	発掘調査	宅地造成工事による先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片出土。(8614)
11・17	宇多1048-47	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
11・25	森町2丁目215	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
11・26				
12・18	下桑町614-54	東雲遺跡	立会調査	住宅建設による掘削で、遺構・遺物等は認められず。
12・23	北豊中町2丁目380-10	豊中遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
12・25	豊中266	豊中遺跡	立会調査	住宅建設による掘削で、遺構・遺物等は認められず。
12・25	北豊中町2丁目10-3	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
1・21	曾根町1丁目467	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし。
1・21	東豊中町2丁目959-5	豊中遺跡	発掘調査	
2・21				(To-32)

表4 昭和60年度調査一覧表(追加分)

(昭和61年3月1日～昭和61年3月31日)

月日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考(調査番号)
3・7	森町2丁目227-105	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
3・7	池浦町2丁目16-3	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
3・13	北豊中町2丁目464 -6 -8 -10 -13	七ノ坪遺跡	発掘調査	住宅建設による基礎掘削で、遺構は認められず。土師器片出土。(8603)
3・15	曾根町2丁目5-6	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
3・19	北豊中町3丁目7-4	豊中遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし。
3・20	池浦町1丁目 74-1 438	東雲遺跡 池浦遺跡 中間点	発掘調査	共同住宅建設による基礎掘削で、遺構は認められず。土師器片出土。(8604)
3・25	宇多1048-95	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし。
3・26	池浦町5丁目207-1	池浦遺跡	発掘調査	住宅建設に先立つ調査で、遺構は認められず。土師器片出土。(8605)

第2章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

大阪府泉大津市は、大阪平野南部（泉州地域）の海岸部に位置する。市の西側は大阪湾に面し、北側は高石市、東側は和泉市、南側は大津川を挟んで泉北郡忠岡町と接している。そして、低位段丘、海岸砂礫堆及び後背低地の上に立地し、山間部を有しない。市の面積は11.68km²、人口は69,168人（昭和62年2月1日現在）と小規模な存在であるが、昭和17年には、府下で7番目に市制が施行され、早くから開けた地域でもある。

市を南北に横切って、私鉄南海電鉄本線と国鉄阪和線が約2km離れてほぼ平行に走り、大阪と和歌山を結んでいる。南海線では北側より、北助松・松之浜・泉大津の3駅があり、急行の停車する泉大津駅は、難波駅より所用時間約20分と近距離にある。

この鉄道と平行して、市内西部の海岸沿いを、府道堺阪南線と大阪臨海線が、又、東部を国道26号線（旧第2阪和国道）の道路が延びている。さらに市内の東西を結ぶ道路として、府道松之浜曾根線・松原泉大津線・泉大津粉河線・市道泉大津中央線があり、道路網は縦横にめぐっている。泉大津市の市街地は、南海電鉄本線と府道堺阪南線に沿って、明治以降、商工業用建物と住宅とで形成されてきた。市の東部は、水田地帯が広がり、農村集落がみられたが、昭和45年に大阪で開催された日本万国博覧会を契機に、商業都市大阪のベッドタウンとして泉州地域が注目され、宅地開発の波が押し寄せた。更に、第2阪和国道の建設と、それに伴う土地区画整理事業が実施され、市街地化が進行している。こうして市域全体が市街化区域となり、市内に20数個あった溜池も、その大半が埋め立てられ、住宅・団地・工場・公園・学校・公民館などの用地に転用されている。

この地域の地場産業の一つに、毛布・ニットを中心とする織物工業があり、特に毛布の生産高は全国の96%を占めている。又、近年、海岸側が堺・泉北臨海工業地帯として埋め立てられ、工場や倉庫が建ち並び、九州小倉と結ぶカーフェリーが発着するなど、港湾の都市としても発展しつつある。

さらには、泉州沖の関西国際空港建設に伴って、空港貨物基地誘地、産業廃棄物処理のフェニックス計画や、泉大津駅東側の再開発計画など新たな発展を目指している。

第2節 歴史的環境

泉大津市が所在する泉州地域は、大阪平野の南部に属し、気候は温暖であったため古くから生



第1図 遺跡分布図

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|------------|
| 1. 大園遺跡 | 2. 森遺跡 | 3. 牛滝塚 | 4. 助松遺跡 | 5. 池上・曾根遺跡 |
| 6. 豊中遺跡 | 7. 七ノ坪遺跡 | 8. 穴師遺跡 | 9. 池浦遺跡 | 10. 東雲遺跡 |
| 11. 薬師寺跡 | 12. 穴田遺跡 | 13. 板原遺跡 | 14. 虫取遺跡 | 15. 大福寺跡 |

活の場・生産の場として開けていた。それは、市内各所に所在する遺跡の数からも首肯される。現在、市内には、大園、豊中、板原、池上・曾根、池浦、虫取、東雲、七ノ坪、穴師、穴田といった集落遺跡や、穴師薬師寺、大福寺などの寺院跡、又、考古学的に確認されていないが、千原城、刈田城、真鍋城、城の山等の城址が先人の足跡として残されている。これら市内の遺跡を中心に、周辺の遺跡にも言及しながら、この地域の歴史的環境の概略を以下に述べていく。

一旧石器時代一

人類が、この地球上に出現したのは約200万年前だと言われている。猿人、原人、旧人、新人と進化する間に、言葉、火、道具の使用によって文化が築き上げられてきた。日本で最初の文化があらわれるのは旧石器時代で、今から約10万年前から1万2千年前までの間で、洪積世に属する。この時代の人々は、狩猟・採集を行ない、定住せず移動の生活を送っていたと考えられる。

泉大津市内では、現在のところ旧石器時代に属する遺物は発見されていない。泉大津市・和泉市・高石市の3市にまたがる大園遺跡の段丘上より、後期旧石器時代のナイフ形石器と、旧石器終末期より縄文時代草創期・早期の有舌尖頭器が出土している^①。又、隣接する和泉市の大床遺跡からは、サヌカイト製のナイフをはじめ、石核・剥片約30個が検出された^②。和泉市伯太北遺跡・和気遺跡^③、堺市野々井遺跡・百舌鳥本町遺跡、岸和田市西山遺跡・琴山遺跡・葛城山頂遺跡・海岸寺山遺跡等で、旧石器時代に属すると思われる石器や剥片の出土がある。以上の遺跡は、段丘上や丘陵上に立地するという特徴をもっており、人々の行動の範囲を示している。

一縄文時代一

日本で最初の土器文化にあたる縄文時代は、今から約1万2,000年前から2,300年前までの間と考えられている。この時期は、狩猟漁撈採集が主であるが、中期には、栽培が行なわれた縄文農耕を主張する説もある。遺跡としては、東北・関東地域や中部山岳地帯に多く、近畿地方の発見例は少ないが、最近の開発に先立つ調査で新発見の遺跡は増加しつつある。

泉大津市においては、現在のところ縄文時代の明確な遺構は検出されていないが、板原遺跡では、後期中津式を伴う自然流路や福田KII式の遺構面、晩期の溝状遺構やピット等が報告されている^④。又、豊中遺跡でも埴積谷の旧河道内より中期末の土器片が発見される^⑤など、縄文人の存在を窺わせる。虫取遺跡では、晩期に属する土器が、弥生時代前期中頃の土器と共に出土し、縄文文化から弥生文化への過渡期の様子を示す好資料を与えてくれた^⑥。

周辺の遺跡を見てみると、和泉市では信太山丘陵から前期の打製石匙、伯太北遺跡では中期から後期の土器、府中遺跡では石棒・石鎌と共に後期中葉の土器が出土している。仏並遺跡からは、

早期後半の鶴が鳥台式土器片や、後期前半に属する素焼きの土製仮面が発見された^⑦。土製仮面は、東日本において出上例はあるが、近畿地方では珍らしく、縄文人が悪霊退治や厄払いの神事などでかぶったとみられ、文化圏を探る貴重な資料であるといえる。このほか、池上・曾根遺跡や万町北遺跡からも遺物の出土がみられた。堺市からは、万崎遺跡・石津町東遺跡・南履町遺跡・百舌鳥陵南遺跡をはじめ、四ツ池遺跡などがあげられる。又、岸和田市においては、葛城山頂から中期、箕土路遺跡で中期初頭、春木八幡山遺跡で後期から晩期にかけての土器が出土し、西山遺跡や下池田遺跡からも土器片が発見されている。

以上のように、縄文時代の遺物が多方面で出土しているが、遺構の発見例は少なく、生活痕を探ることは非常に困難であったが、最近の開発に先立つ調査で、数多くの成果が得られつつあり、今後に期待されるところが大である。

一 弥 生 時 代 —

縄文時代から弥生時代へと移行する過程を明らかにする遺跡が、福岡市板付遺跡をはじめ九州各地で発見されるようになって、その過渡期の文化の重なるの様子が、徐々に解明されつつある。近畿地方においても同様で、最近の調査の成果にめざましいところがある。

弥生文化の特徴である稲作農耕や、金属器使用の初期段階は、弥生土器が縄文土器と共伴したり、縄文土器の根柢等により、それを窺い知ることができる。

新しい文化は、大陸より朝鮮半島を経てBC200年頃に北九州に伝播され、弥生文化として急速に東進し、伊勢湾西岸まで伝わるのにさほど時間はかからなかったようである。堺市四ツ池遺跡出土の縄文土器に根柢が認められ、泉州地域における最初の米作りと考えられている。これは、それまでの食糧獲得経済から、食糧生産経済への転換を示すものであるが、米作りが弥生人の食糧として、年間を通じて賄えるほどの収穫を得られるものでなく、依然として米以外の食料、特に自然食料に多く依存しなければならなかった^⑧。

泉大津市池浦遺跡は、市内で最も古い弥生時代の遺跡の一つで、前期中段階に形成された集落であり、低位段丘上に位置し、居住区は人工によるV字溝で限定されていたと思われる。この集落は、短期間のうちにその生命を失ったようで、中期以降の土器は発見されていない。虫取遺跡も人工の、V字溝が検出され、第1様式新段階から第2様式の土器が、晩期の縄文土器を伴って大量に放棄されていた^⑨。和泉市池上町から泉大津市曾根町にかけての池上・曾根遺跡は、弥生時代の全期間を通じて、集落の生成・発展過程を知らしめる遺跡である。それは、前期に集落が形成され、中期にはその周囲を環濠が圍繞し、後期になると分散の傾向を示し、やがて古墳時代の集落へと移行する様子が発掘調査で明らかにされた。又、出土品は土器・石器・木器等膨大な量で

他地域の人々との交流を示すものもある。以上の重要性から昭和51年に史跡指定がなされた。

この時代の水田は、七ノ坪遺跡によって、畦畔の規模や取水方法等が知られる。他に遺跡としての実態は不明であるが、中期の甕棺が出土した穴師小学校校庭遺跡や、有鉤銅鋳を出土した古池遺跡（昭和61年度より豊中遺跡に含まれる）、砂丘遺跡かと思われる助松遺跡などがある。

周辺の遺跡では、前期に始まるものとして、堺市諏訪森遺跡・鳳遺跡、岸和田市春木八幡山遺跡・加守三味山遺跡などがあり、中期では、和泉市万町北遺跡・府中遺跡・和気遺跡、高石市大園遺跡、岸和田市田治米遺跡・箕土路遺跡・畑遺跡・上松中尾遺跡など、後期では、和泉市惣ノ池遺跡・観音寺遺跡、堺市田出井町遺跡・三國ヶ丘遺跡・金岡遺跡などがある。

—古墳時代—

古墳時代は、その開始時期に諸説があり、各々一理あって断定し難いのであるが、凡そ3・4世紀頃であり、7世紀まで続き、高塚墳墓が築かれることに代表される時期である。それは、地方豪族が軍事的結合をもって地域集団を形成し、やがて古代国家へと昇華していく時代として把握することができる。

泉大津市においては現在、古墳は存在しないが、古い地形図によると塚らしいものが見られ、かつては存在していた可能性もある。又、東雲遺跡からは埴輪片が出土しており、古墳もしくは祭祀遺跡との関連が考えられる。前期古墳からみていくと、和泉市黄金塚古墳は、信太山丘陵の先端部に位置し、主体部が木棺直葬の粘土槨3体を有し、中央棺には女性が埋葬されていたと推定される、前方後円墳で、景初三年銘の画文帯神獸鏡を埋納していたことで有名である。岸和田市摩湯山古墳は、全長約200mの大形前方後円墳で、その築造法として丘尾切断説を首肯させるものである。他に、久米田古墳群があげられる。前期から中期にかけては、和泉市丸笠古墳がある。中期は、古墳の全盛時代ともいえ、深をめぐらした大型の前方後円墳に象徴され、堺市百舌鳥古墳群はその代表的なものである。帆立貝式古墳として、和泉市貝吹山古墳・玉塚古墳、高石市大園古墳などがあげられる。後期になると、古墳築造を可能とした階層範囲が広がり、その多くは群集墳として形成された。周辺部では、和泉市信太千塚、堺市陶器千塚があげられる。高石市富木塚塚古墳は多くの主体部を有する前方後円墳であった。

集落遺跡は、昭和50年代に平野部で行なわれた道路建設に先立つ調査で、急激に発見例が増加した遺跡である。泉大津市における遺跡も例外ではない。古墳時代初期に属するものとして、豊中遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡があり、竪穴住居で集落は構成されている。七ノ坪遺跡は、この住居と共に、弥生時代からの伝統的墓形態である方形周溝墓や土壇墓も発見されており、高塚墳墓の被葬者と階層的差異によるものか、あるいは文化の相違に由来するものなのか問題となると

⑩
ころである。この外、水田跡も検出され集落の一つのまとまりを示している。又、遺物散布地として、板原遺跡・虫取遺跡・助松遺跡・穴師遺跡などがある。

周辺部の遺跡では、和泉市万町北遺跡・府中遺跡・上町遺跡、高石市大園遺跡・水源地遺跡、岸和田市重の原遺跡・土生遺跡などがあり、それぞれ調査報告書が刊行されている。

—飛鳥・白鳳・奈良・平安時代—

朝廷や巨大氏族は大陸文化や朝鮮半島の文化を積極的に摂取し、宮都の造営や寺院の建立に力をそそいだ。その背後には仏教の影響が大きく働いている。渡海に非常な困難が伴った遣隋使、遣唐使の役割は大きく、律令国家確立にその使命を果たした。

泉州地域は河内国に属していたが、奈良時代には独立して和泉国府が置かれた。泉大津の浜は小津の泊として紀貫之の「上佐日記」にも見られ、国府の港すなわち国府津（津とは港のこと）として、現在も高津町にその名を残す。国府と国府津を結んだと思われる勅使道に沿って形成された集落として東雲遺跡があり、孤立柱建物が10数棟検出されている。出土遺物により、それらの建物は奈良時代から鎌倉時代初期までの間に属し、主軸方向が異なることや重複することで何度も建て直されていると考えられる。

豊中遺跡から、平安時代後半に属する方形井戸が1基検出され、井戸内には「田井」「田井殿」と高台部内側あるいは体部外面に墨書された内面黒色土器や、灰胎陶器・土鍋・土師器杯が埋められ、井戸の機能は失われていた。^⑪

白鳳時代創建とされる泉穴師神社、その神宮寺として栄え、崇敬を集めた穴師薬師寺の跡や豊中遺跡からは、平安時代末以降の瓦が出土している。穴師薬師寺は、宝亀年中に大津浦に流れついた木像の薬師如来を、穴師村に草堂を建てて安置したのに始まり、平安時代の中頃に大規模となり、代々の天皇より繪旨院直が下された寺院である。基壇が発掘され、「穴師堂」銘瓦や宋銭が出土している。豊中遺跡内には「大福寺」の小字名が残り、これは江戸時代まで存続した寺院である。板原遺跡からは平安時代の掘立柱建物が検出されている。遺物散布地として、穴師遺跡や虫取遺跡、大園遺跡があげられる。

和泉市府中町には、奈良時代（天平宝字元年）に和泉国府の国衙が置かれたが、その位置、規模など具体的なことは不明である。氏寺として和泉寺・池田寺・坂本寺・信太寺などが存在しており、横尾寺・松尾寺も奈良時代の寺院である。国分町には福徳寺があり、もと安楽寺といい、平安時代（承和6年）に国分寺として認められている^⑫。平安時代後期には末法思想が流布し、理経が行なわれるようになった。横尾山施福寺境内では経塚が発掘され、広く世に知られている。

—鎌倉時代・室町時代—

貴族の没落と共に武上の台頭が起こり、遂には源頼朝による鎌倉幕府の樹立で武家政権が始まり、建武の中興時期を除いて、興亡を繰り返しながら武家政権は明治維新まで続くことになる。

泉大津市内における中世の遺跡として、まず東雲遺跡があげられる。この遺跡は平安時代に始まり、鎌倉時代初期に至る掘立柱建物で構成される集落遺跡である。古池遺跡から、鎌倉時代の倉庫等の掘立柱建物、板原遺跡からも同時代の掘立柱建物7棟が、又、七ノ坪遺跡からも小溝群とピットが発見されている。豊中遺跡においては、土釜（羽釜）や曲物を井筒とした井戸、河原石組の井戸などから、瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質鉢鉢、瓦、土師質小皿などの遺物も多数出土している。しかし、建物跡となると、特に鎌倉時代後半から室町時代にかけては、今のところ1例も確認されていない。その理由は、地面の削平によるものなのか、建物の基礎構造が痕跡を残さないものなのかのいづれかと思われるが、断言はできない。穴田遺跡は、土釜を積み上げた井戸の発見によって昭和31年に周知された遺跡であるが、その実態は不明である。遺物散布地として、虫取遺跡・穴師遺跡・池上・曾根遺跡などがある。

周辺の遺跡では、和泉市和気遺跡が、屋敷の周囲に堀と柵を巡らす中世豪族の居館跡として、数少ない発掘例であり、貴重な存在である。

第3章 発掘調査報告

第1節 豊中遺跡

1 調査に至る経過

泉大津市豊中・北豊中町及び東豊中町一帯に所在する豊中遺跡は、昭和30年代中頃に発見された遺跡であるが、国道26号線及び土地区画整理事業の完成に伴い、開発行為が増加し、現在までに市内で最も数多くの発掘調査が実施されている。その調査結果の概略は次のとおりである。



第2図 豊中遺跡調査地点図

まず縄文時代後期の土器が、埋積谷の川河道砂礫層内より発見されている。この層内上部には、土師器や須恵器が含まれており、平安時代頃まで河川が存続していたものと思われる。この部分は土地区画整理が実施されるまで溜池であったが、それが築造されたのは、鎌倉時代か、もしくはそれに近い時期と考えられる。このほか、古墳時代の集落跡が確認されている。集落は、堅穴住居と掘立柱建物とで構成されており、数棟単位で1グループをなしている。このようなグルー

ブが数ヶ所あり、庄内式土器～布留式土器にかけての時期に属するものである。又、平安時代中頃の井戸や、鎌倉時代から室町時代に属する井戸等も検出されている。

2 調査結果

第 1 地 点(北豊中町 2 丁目982-5 調査番号8609)

店舗建設に先立つ調査である。敷地面積は、950.25㎡である。

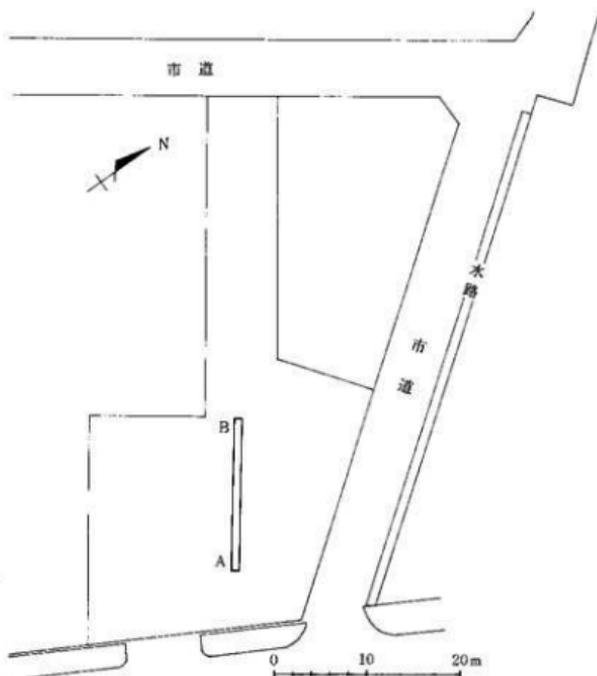
敷地内のほぼ東寄り

に幅約80cm、深さ約90cm、長さ約18mの規模の調査坑を重機で掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

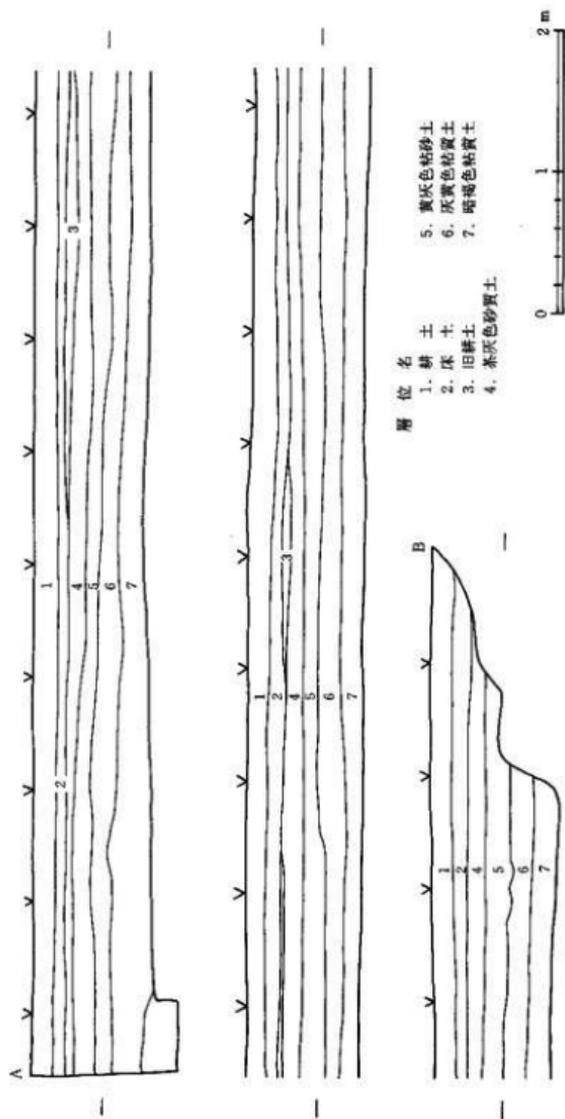
層序は上部より、耕土約15cm、床土約10cm(土地区画整理時に貼ったものである)、茶灰色砂質土約10～15cmで、床土との間に旧耕土が部分的に最大厚10cmで存在する。以下黄灰色粘砂土約8～20cm、灰黄色粘質土約10～20cm、暗褐色粘質土30cm以上となる。

以上の層が単純な堆

積を呈しているのみで、遺構は発見できなかった。遺物としては茶灰色砂質土層中に土師器片、須恵器片、瓦器片がわずかに小破片で発見されたのみである。遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査は終了とした。



第3図 豊中遺跡 第1地点掘削位置図



第4图 德中農隊 第1地点調查結果断面图

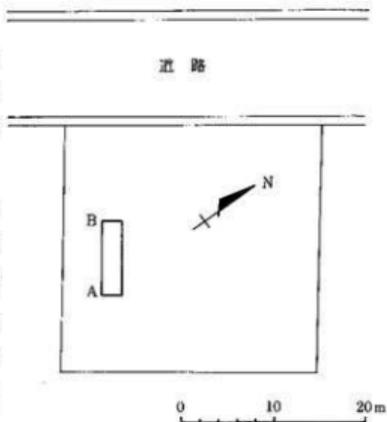
第 2 地 点 (東豊中町 2 丁目 961-1、-32 調査番号 8611)

事務所建設に先立つ調査である。敷地面積は、

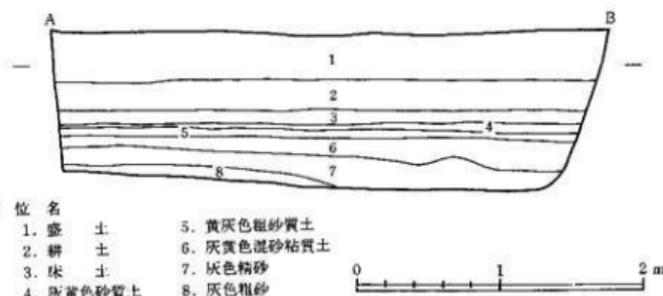
187.35 m^2 である。

敷地内のほぼ北西寄りに、幅約 1 m 10、深さ約 1 m 10、長さ約 3 m 90 の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り断面観察を実施した。

層序は上部より、盛土約 35 cm、耕土約 20 cm、床土約 10 cm、灰黄色砂質土約 2 ~ 7 cm、灰黄色泥砂粘質土約 7 ~ 20 cm、灰色精砂約 10 ~ 20 cm 以上、灰色粗砂 8 cm 以上となる。これ以上の掘削は、湧水と、崩壊のおそれがある為行わなかった。層序は単純な堆積の仕方であるが、灰黄色泥砂粘質土層と灰色精砂は北方向へ行くにしたがって厚くなる傾向であった。



第 5 図 豊中遺跡 第 2 地点掘削位置図

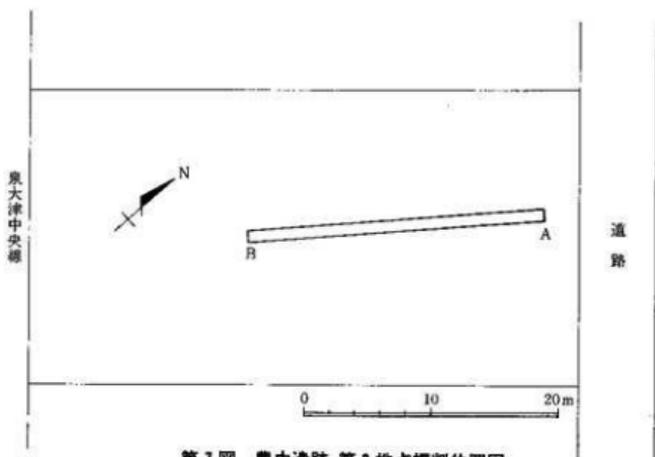


第 6 図 豊中遺跡 第 2 地点 調査坑断面図

遺構・遺物ともに検出されなかったので、既往調査の結果とも考え合わせて、写真撮影及び断面実測図作成で、調査は終了とした。

第 3 地 点 (北豊中町 2 丁目 987-12、-13 調査番号 8612)

共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は 981.81 m^2 である。



第7図 豊中遺跡 第3地点掘削位置図

敷地内のはば中央部に幅約1m、深さ約1m、長さ約23m30の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り断面観察を実施した。

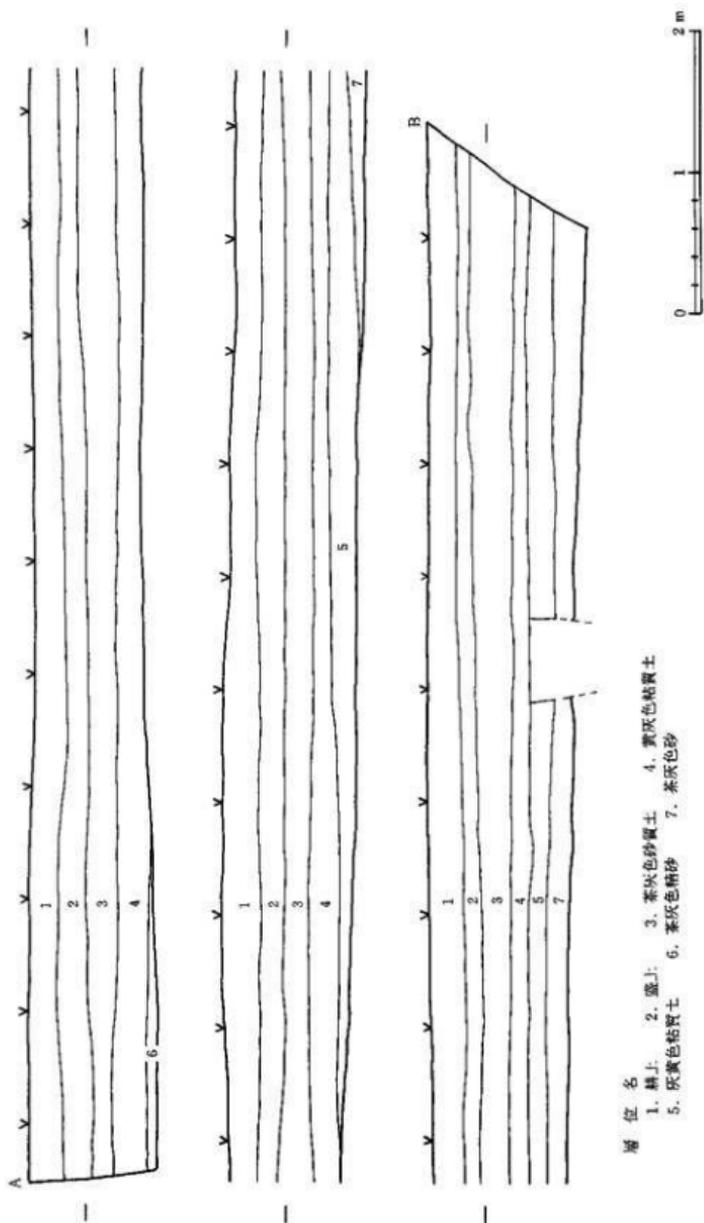
層序は上部より、耕土約20cm、盛土約20cm（土地区画整理時に造成）、茶灰色砂質土約14～30cm、黄灰色粘質土約10～25cmとなり、その下は、北東部で茶灰色精砂、やや南西に寄って黄灰色粘質土、中央部あたりで灰黄色粘質土約10～20cmが見られた。更に南西部へ行くくと灰黄色粘質土の下に茶灰色砂が、又南西端では灰色砂礫が堆積していた。この南西端で灰黄色粘質土上面より掘り込んで土製羽釜利用の井戸が2基検出された。一方は土製羽釜の底を打ち挟いたものを3段に組み上げ、他方はそれより北方向へ約1.8m離れた位置で、同様に2段組みにし、いずれも灰色砂礫層中に達している。

砂層及び砂礫層より湧水が激しく調査は困難をきわめ調査坑の崩壊も始まったため、写真撮影及び断面実測図を作成し、井戸2基の出土状態の写真撮影で井戸枠を取り上げ調査は終了とした。

遺物

羽釜(1)

土師質羽釜転用の井戸枠である。口縁部は肥厚で内弯しながら上方へのびた後、端部はわずかに外方へ屈曲しており、端面は丸く1条の凹線を有する。鈎は幅約2.5cm、厚さ約0.6cmであり、ややナメ上方向に張り出しており、端部は平らである。口縁部内面は横方向にナデた後、縦又はナメ方向にナデてあり、同外面はヘラナデ後、指押えにより整えてある。胴部内面の調整は



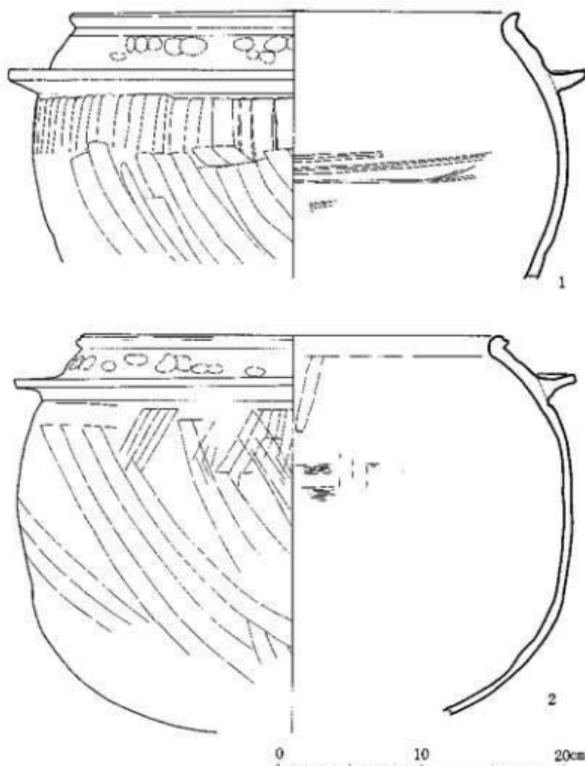
層位名
 1. 粘土 2. 盛土 3. 茶灰色砂質土 4. 黃灰色粘質土
 5. 灰黃色粘質土 6. 茶灰色粉砂 7. 茶灰色砂

第 8 圖 臺中港路第 3 港新築填土式斷面圖

口縁部内面と同様であり、途中付け足した後がみられる。同外面はへらでナナメ方向にナデである。底部は丸みをおび、20cm×16cmの楕円形に穿たれている。鐔は両面共指押えをした後へらで横方向にナデて整えてある。

羽釜(2)

土師質羽釜転用の井戸枠である。口縁部は肥厚で内弯しながら上方へのびた後、端部はわずかに外方へ屈曲しており、端面は丸い。鐔は幅約2.4cm、厚さ0.7cm前後であり、ややナナメ上方方向に張り出しており、端部は平らである。口縁部内面



第9図 壘中遺跡 第3地点出土遺物

は横方向にナデてあり、同外面は横方向にナデた後指押えをしている。端部は横方向のナデにより整えてある。胴部内面はへらで横方向にナデており、同外面の上部はへらで横削り後、横方向にナデてあり、中部はナナメ方向にへら削りをした後へらナデを施す。鐔より下方約14cmの所で穿たれている。鐔は両面共指押えをした後へらで横方向にナデて整えてある。

第4地点(北豊中町3丁目979-29 調査番号8614)

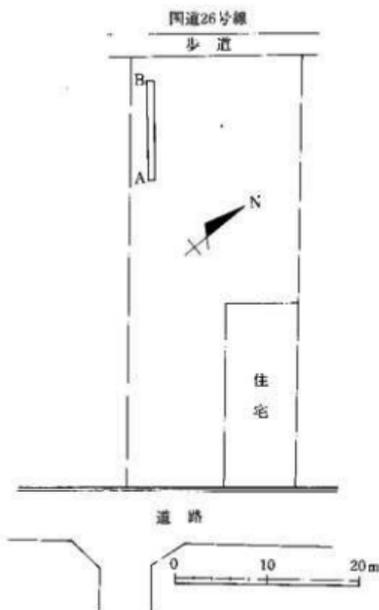
宅地造成工事に先立つ調査である。敷地面積は495㎡である。

敷地内の南西寄りに、幅約80cm、深さ約60cm、長さ約11mの規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面及び床面を削り、断面観察を実施した。

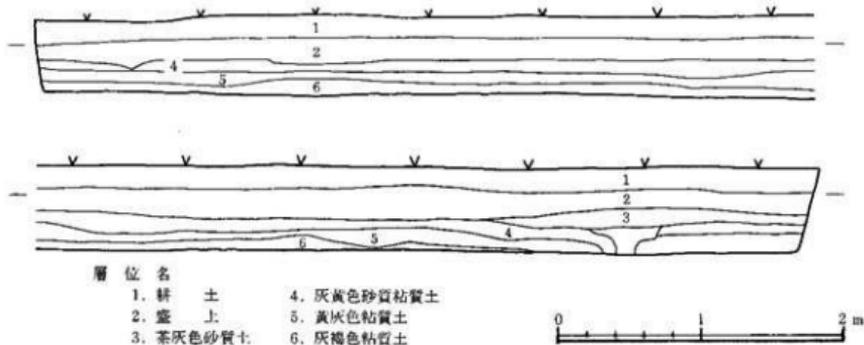
層序は上部より、耕土約18cm、盛土約12~25cm(土地区画整理時に造成)、灰黄色砂質粘質土約5~12cm、黄灰色粘質土約5~14cm、灰褐色粘質土10cm以上であった。但し調査地の北西端で、盛土下に茶灰色砂質土約6~13cmが徐々に見られ、灰黄色砂質粘質土及び、黄灰色粘質土を切って茶灰色砂質粘質土が堆積していた。

遺構は確認できなかったが、黄灰色粘質土層及び灰褐色粘質土層中に土師器片の磨耗したものが少量出土した。いずれも小破片であるため図示しえない。

付近の既往の調査結果とも考え合わせて、遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査は終了とした。



第10図 豊中遺跡 第4地点掘削位置図



第11図 豊中遺跡 第4地点調査断面図

3 まとめ

豊中遺跡は範囲は広いが、遺構の在り方には多寡があり、今回の調査はいずれも稀薄の部分であった。ただし第3地点付近は、砂利層が存在し、地下水の豊富な場所であり、既往の調査においても井戸の検出をみているところである^①。全てが、平安末期から室町時代の間に使用された井戸であるが、建物跡は発見されていない。これは、当時の建物が考古学的に追求できる構造ではなかったためと思われる。又古墳時代から上記時代までの井戸の検出例もない。堅穴式もしくは平地式が一般的な建物であった頃には、住居用地として適していなかったからであろう。

第2節 板原遺跡

1 調査に至る経過

泉大津市板原の水田地帯は、市の南部に位置し、南側は横尾川・松尾川を隔てて忠岡町と、又東側は和泉市肥子町と接している。昭和50年代の中頃までは、目立った道路もなく、条里制施行



第12図 板原遺跡調査地点図

の跡を示す水田の畦畔が存在するのみであった。ここにおいて、土地区画整理がなされ、第2阪和国道（現国道26号線）が建設されると、整然とした街路が縦横走ることになるので、これらの工事に先立ち道路部分において発掘調査が実施された。まず、昭和52年に土地区画整理事業に先立ち、豊中・古池遺跡調査会が試掘調査を実施したところ、第2阪和国道部分より、縄文土器、須恵器、瓦器、磁器等の破片が出し、各々の時期に属する遺構の存在が予想された。それにより、昭和54年度、府教育委員会が国道部分を全面発掘調査した結果、縄文時代後期の自然流路及び土器、晩期の溝状遺構、ピット等と土器が発見され、人々の生活痕の一部が窺われた。弥生時代の遺構は検出されなかったが、僅かな遺物が出土している。古墳時代前期の遺構や、平安時代の建物のほか、鎌倉時代には小規模な建物群が存在するなど、中世にまで及ぶ複合遺跡であることが判明した。道路網完成後は、それに沿って新しく建物等の建設事業が行なわれようとしている。

今年度この遺跡内において3ヶ所（第12図）で建設工事に先立ち調査を実施した。

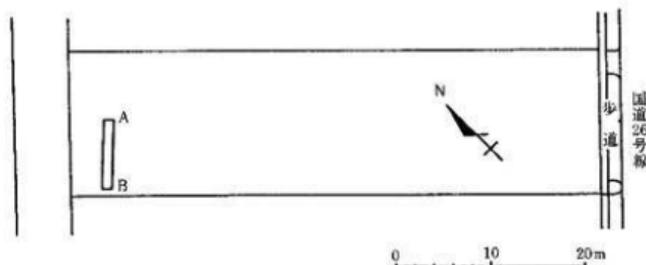
2 調査結果

第 1 地 点（板原30 調査番号8607）

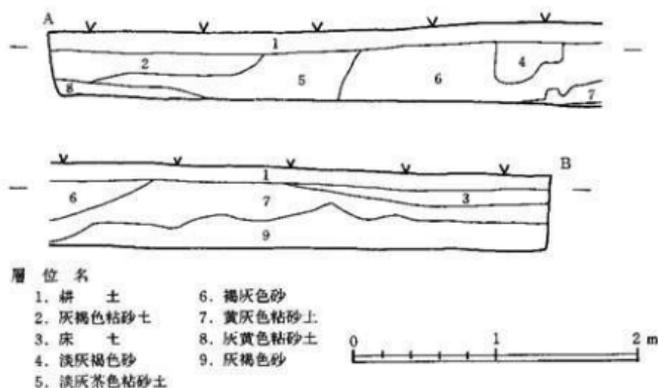
盛土による宅地造成工事に先立つ調査である。敷地面積は847㎡である。

敷地内の北西寄りに、幅約1m、深さ約60cm、長さ約7m40の規模の調査坑を、重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は、耕土15cmの下に南寄りで土地区画整理時に貼られた床土が一部見られた外は、砂及び粘砂土が第14図に示すように複雑に堆積しており、河川の氾濫原の様相を呈している。遺構・遺物ともに検出されなかったので、写真撮影、及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第13図 板原遺跡 第1地点掘削位置図



第14図 板原遺跡 第1地点調査城断面図

第2地点 (板原66・67 調査番号8610)

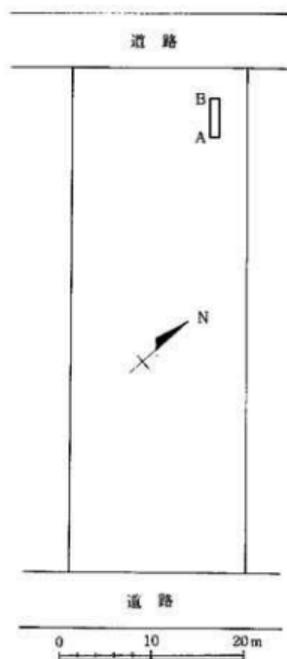
倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は、1,030㎡である。

敷地の北寄りに、幅約1m、深さ1m65、長さ約5m20の規模の調査城を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

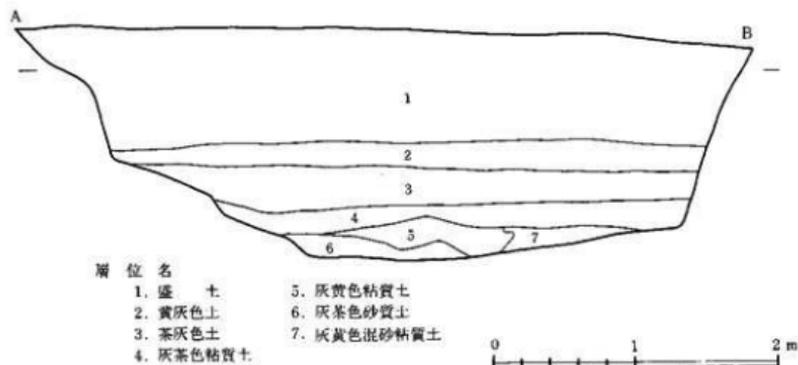
層序は上部より盛土約80cm、黄灰色土約10～20cm、茶灰色土約10～34cm、灰茶色粘質土約8～20cmとなり、その下は灰黄色粘質土が北方向へ行くにしたがって徐々に厚くなり、灰黄色泥砂粘質土と変化している。その下部に灰茶色石が15cm以上に堆積する。

遺構は検出されなかったが、灰茶色粘質土層及びその上層には、土師器片、須恵器片が包含されていた。しかしそのいずれもが小破片であるため図示しえない。

以上の結果であり、倉庫の基礎掘削は盛土内におさまる設計であるため、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第15図 板原遺跡
第2地点掘削位置図



第16図 板原遺跡 第2地点調査坑断面図

第3地点 (板原78-1、-2 調査番号8613)

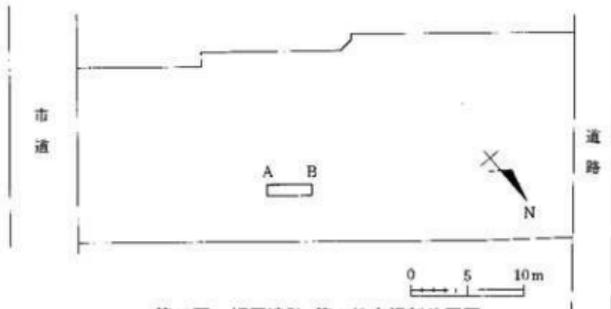
共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は742.67㎡である。

敷地の南東寄りに幅約80cm、深さ約85cm、長さ約3m60の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

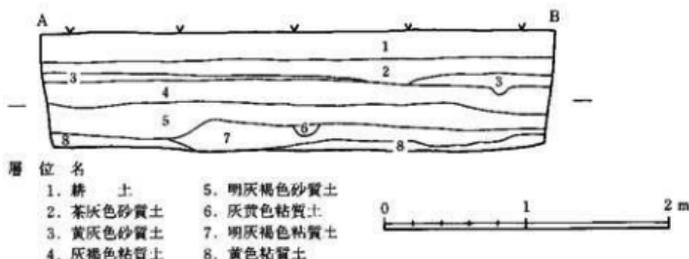
層序は上部より耕土約20cm、茶灰色砂質土約8~18cm、黄灰色砂質土となり、黄灰色砂質土は約10cmの厚さで北へ行くに従って徐々に薄くなり、やがて消滅するが、北側で再び約10cmの厚さで見られる。その下は灰褐色粘質土約10~18cm、明灰褐色砂質土約10~26cmとなる。南側ではその下に黄色粘質土が見られるが、大部分は明灰褐色粘質土最大厚22cmが間に挟まり徐々に薄くなっている。又、この明灰褐色粘質土上面に灰黄色粘質土がブロック状に存在する。

明灰褐色砂質土層中に土師器片が見られたが、小破片で、しかも磨耗しており図示し得ない。

遺構は発見できなかった。よって写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第17図 板原遺跡 第3地点掘削位置図



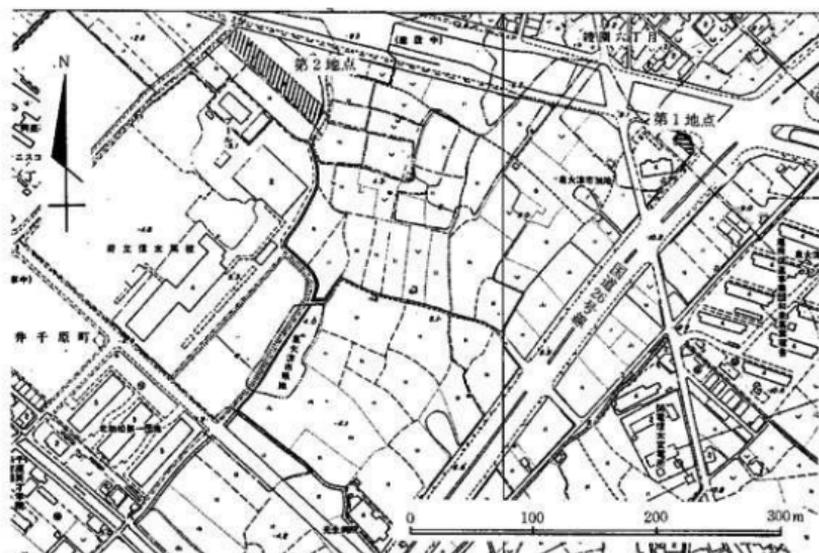
第18図 板原遺跡 第3地点調査地断面図

第3節 大園遺跡

1 調査に至る経過

大園遺跡は、高石市西取石・綾園を中心に和泉市葛ノ葉、泉大津市綾井にまたがる大集落遺跡である。この遺跡も豊中遺跡と同様、第2阪和国道建設に先立つ調査で高石市域に於て発見されたものであり、その成果は次のとおりである。先ず、円墳状の高まりを見せる裾部が発見され、円筒埴輪、朝顔形埴輪や人物埴輪が出土し、その後の調査で削平された軌立貝式古墳であることが判明した。これは「大園古墳」と名付けられた。又、埴仏も他の場所より出土し、古代寺院の存在も予想させた。更に、黄灰色土の所謂「地山」から旧石器が出土したことが、その遺跡の時代的幅広さを物語っている^⑧。その後の府教育委員会、大園遺跡調査会、高石市教育委員会等の調査により、遺跡の範囲が更に広がり、和泉市、泉大津市まで伸び、遺構が存在する段丘及び段丘斜面上には、5世紀後半及び6世紀後半の独立柱建物が120棟以上群をなしており、その屋や倉の構成から古墳時代集落の構造を解明させる数少ない遺跡の一つとなっている。以上の他にも奈良・平安・室町の各時代の独立柱建物も検出されており、大複合遺跡として知られているが、その成果の膨大さには驚かされるものである。

今回、国道26号線（旧第2阪和国道）と府道松原泉大津線の交差点付近で倉庫付事務所建設計画がなされ府教委による道路部分での調査結果から遺構の存在が予想されたので、開発者と協議の結果、発掘調査を実施した。（第1地点、調査番号OZ-2）又、府立信太高校の付近で共同住宅の建設計画が事前協議で申し出され、やはり発掘調査を実施した。（第2地点、調査番号8701）

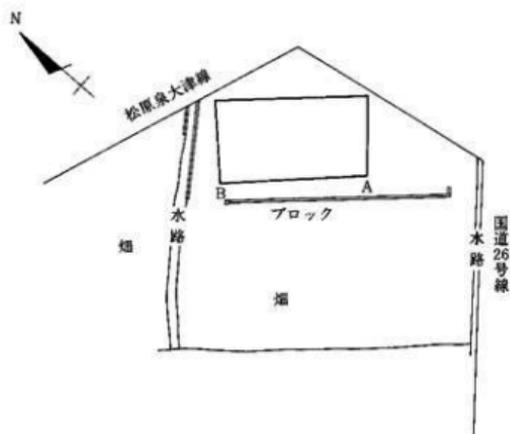


第19図 大園遺跡調査地点図

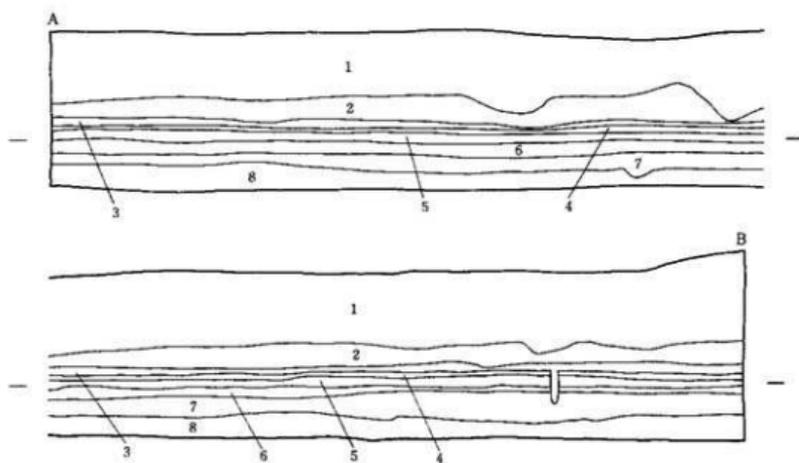
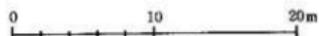
2 調査結果

第 1 地 点(綾井54-2 調査番号OZ-2)

倉庫付事務所建設に先立つ調査で、敷地面積は149.82㎡である。調査期間は昭和61年9月29日から10月3日までである。当該地は変形五角形をしており、民家が建っていたが、既に撤去されていた。この敷地内に14.5m×5.8m、84.1㎡の規模の調査坑を設定し、重機で盛土及び耕土を除去、その後人力にて掘削を行った。耕土下には通常床土が貼られ、水田の水抜けを防いでいるのであるが、ここではそれは見られなかった。そして南東側で黄褐色砂質土、中央部で淡茶褐色砂質土、北西側で灰白色砂質土が約5cm堆積し、土師器・須恵器・瓦器・青磁の各破片が包含されていたが、遺構は検出されなかった。下の灰黄色土面を精査したが遺構は確認できなかったので、この層も除去し、灰茶色砂質土に達したが遺構はやはり見られなかった。深さは地表より約70cmとなり、建物の基礎掘削はこの深さまでであるので、これ以下の掘削は中止して南側にトレンチを1本設けた。断面観察では、更に灰茶色粘質土約10cm、茶灰色粘質土・黄灰色粘質土約5～20



第20図 大園遺跡 第1地点掘削位置図



層位名

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 盛土 | 5. 灰茶色砂質土 |
| 2. 耕土 | 6. 灰茶色粘質土 |
| 3. 灰色砂質土 | 7. 灰色粘質土 |
| 4. 灰黄色土 | 8. 黄色粘質土 |



第21図 大園遺跡 第1地点調査坑断面図

cm、黄色粘質土となる。遺物としては、灰茶色粘質土より土師器・須恵器・瓦器の小破片、茶灰色粘質土より土師器片と須恵器の杯身・甕・蛤甕等の破片、瓦器片、黄灰色粘質土より土師器・須恵器・瓦器の各小破片が出土し、黄色粘質土上面からは須恵器杯蓋片(3)が検出された。

遺物

須恵器杯蓋(3)

天井部は、比較的平らに近く、外面は回転ヘラ削りが施され、稜は短かくて鋭い。口縁部はやや「ハ」の字形に外反し、回転ナデ調整がなされている。内面は回転ナデ調整であるが、特に天井部と口縁部の境目には、ヘラ工具による回転ナデ調整がみられる。I 型式 2 段階^⑤に属する。



第22図 大園遺跡
第1地点出土遺物

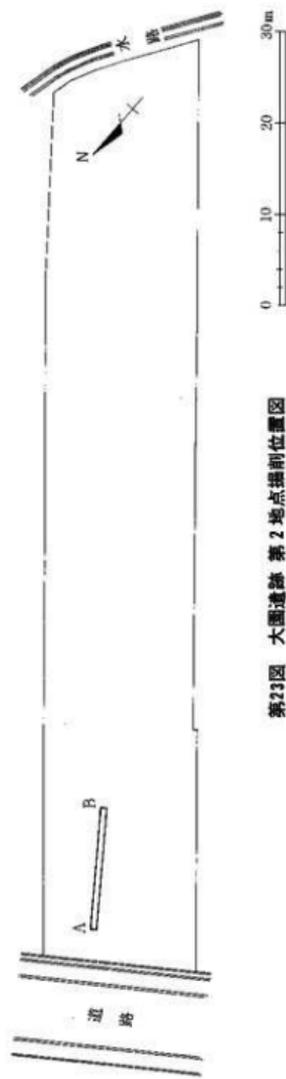
第2地点(綾井17、18-1 調査番号8701)

共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は1601.39㎡である。

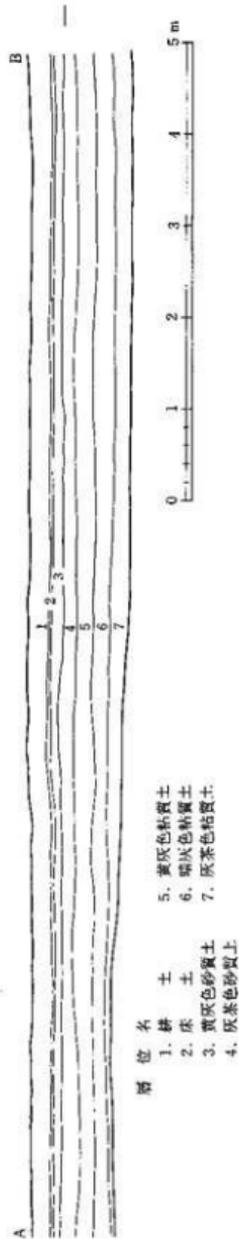
敷地の北寄りに幅約80cm、深さ約1m10、長さ約13mの規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より耕土約23cm、床土約4cm、黄灰色砂質土6~13cm、灰茶色砂質土10~20cm黄灰色粘質土約20cm、暗灰色粘質土12~25cm、灰茶色粘質土20cm以上となる。比較的単純な地積の様相を呈している。

遺構・遺物ともに発見できなかったため、写真撮影及び、断面実測図を作成して調査は終了とした。



第23图 大園遺跡 第2地点掘削位置图



層位名

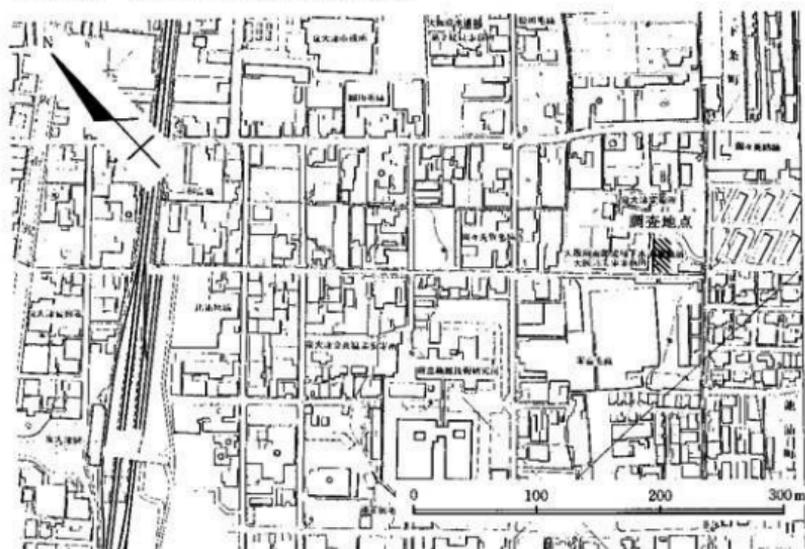
1. 埴土
2. 灰土
3. 黄灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 黄灰色粘質土
6. 紫灰色粘質土
7. 灰褐色粘質土

第24图 大園遺跡 第2地点調査式断面图

第4節 東雲遺跡

1 調査に至る経過

昭和52年、東雲町地番で、大阪府南部流域下水道・南大阪湾岸工区事務所の建設工事着工直後、市民より、付近において以前工事中多量の土器が出土していることから、調査の必要があるのではないかとの指摘があった。府教育委員会は府下水道事業所と協議の結果、事前に発掘調査を実施することになり、豊中・古池遺跡調査会が調査を行った。これが東雲遺跡発見の発端である。この調査で、古墳時代前期の堅穴住居址2軒、井戸2基、溝2条が発見された。又、中世の獨立柱建物16棟が検出され、4期に分けられると推定される。本遺跡は市内でも最も海岸寄りになる集落遺跡で、付近は宅地化が進んでいるため上記場所周辺に農地を残すのみである。故にそれ以後日立った開発は行なわれておらず、調査の機会もなかったため、上記調査が唯一のものであった。このたびその東側の隣接地において共同住宅建設計画がおこり、事前協議の申し出がなされた。市教委では調査の必要から、協議の結果、今回の調査を行なった次第である。調査期間は昭和61年7月21日～8月26日までの約1ヶ月間である。



第25図 東雲遺跡調査地点図

2 調査結果(東雲町65-2、66-3 調査番号SIN-2)

共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は660㎡、建築面積は281.62㎡であるが、調査面積は建築位置に約340㎡(13.7×24.8)と少し大き目に掘削する。

敷地内の西寄りに重機で耕土及び床土を除去し、東側を土置場とする。この段階で丁寧に土を削平すると、遺構が検出された。目立った遺構としては掘立柱建物1棟、大ピット1、河川1、溝1で、他にピット数約130個がある。以下個々の遺構について記述する。

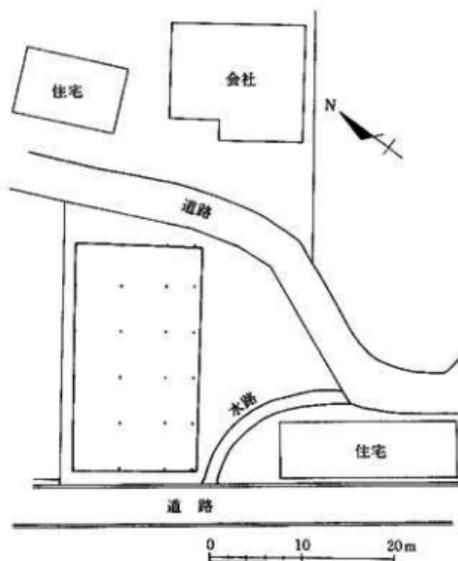
遺 構

掘立柱建物(第28図)東西6間、南北4間の大規模な建物である。棟方向はほぼ東西軸で14°北へ傾いている。桁行8m15、梁間5m80、柱間寸法は桁行1m10～1m60、梁間1m30～1m60である。掘り方の平面形は円形、長方形、楕円形、不整形と様々な形を呈し、柱の直径は約15cmである。深さは最小9.5cm、最大30cmで、大体は10cm～25cmの間にある。

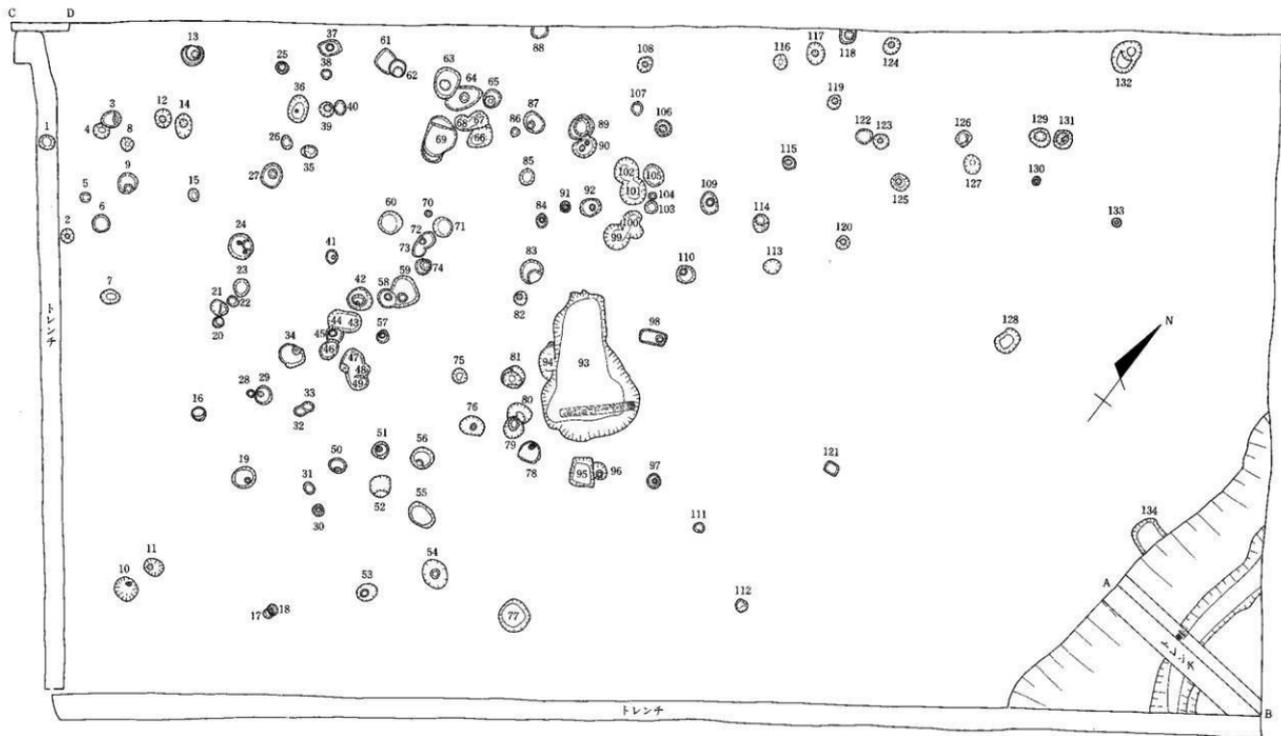
埋土は灰茶色土である。

大ピット93 長軸約3m、短軸約2mの規模の変形楕円形を呈しており、深さは約80cmである。埋土を除去すると直径約25cm、長さ1m60の電柱が埋められていた。

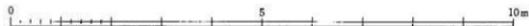
河川状遺構 調査区の東隅で検出、ほぼ南北の流路で幅は調査範囲外におよぶため不明。深さ約40cmで第29図に示すような堆積をしている。左岸にあたる部分には、足跡状のくぼみがみられた。河川内上層からは土師器片・須恵器片(9)・紡錘車(10)が、又、下層からも土師器片や須恵器片が多数出土した。特に下層から須恵器の完型品(5・6・7・10・11)が検出され、このうち6と7の杯身と杯蓋はセット関係になるとと思われる。双孔円板(13)も出土している。出土遺物より、古墳時代に属する。

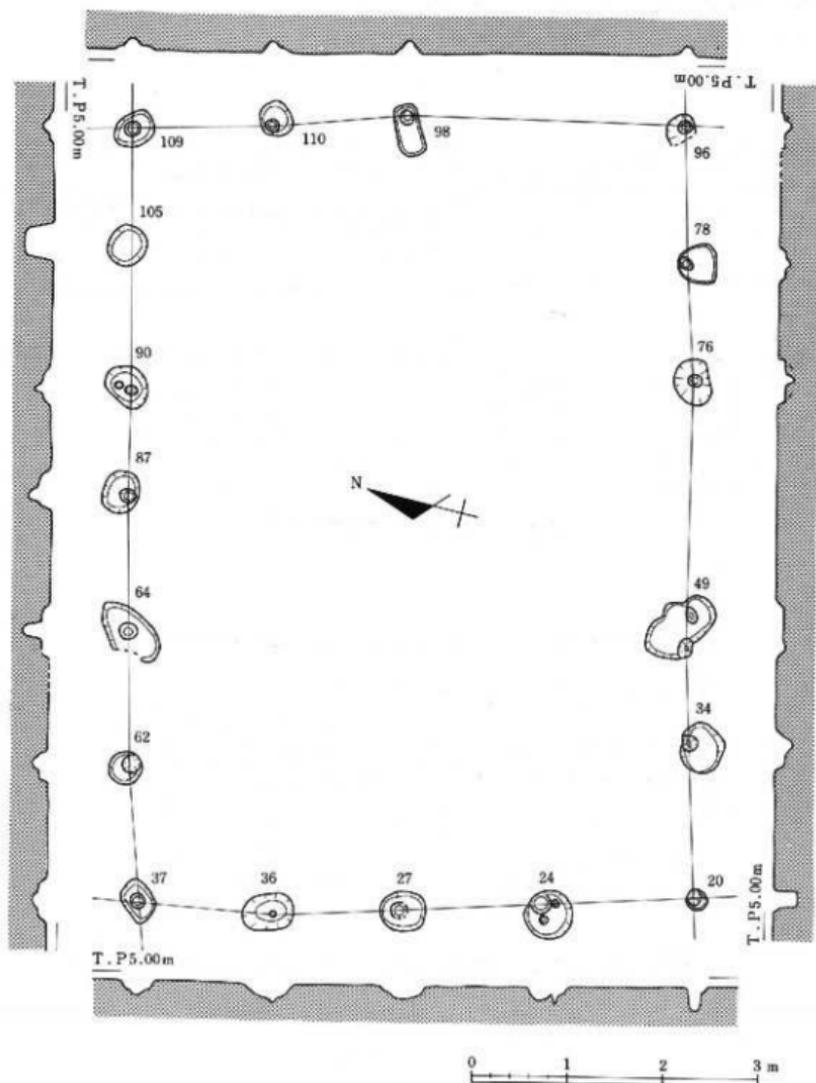


第28図 東雲遺跡掘削位置図



第27図 東壘遺跡遺構図

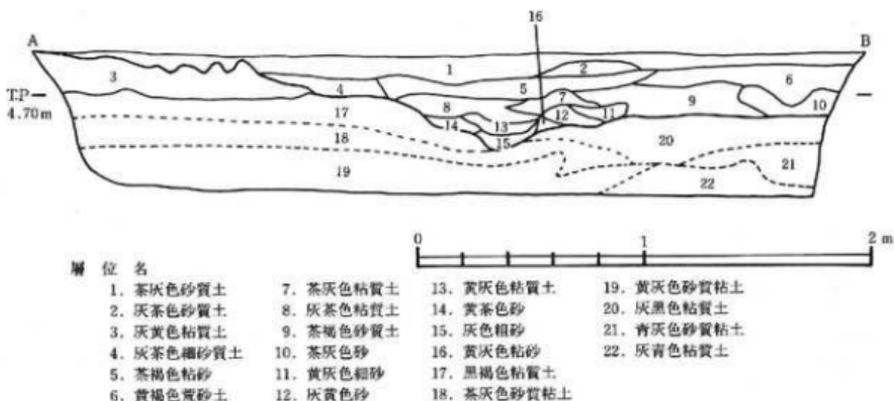




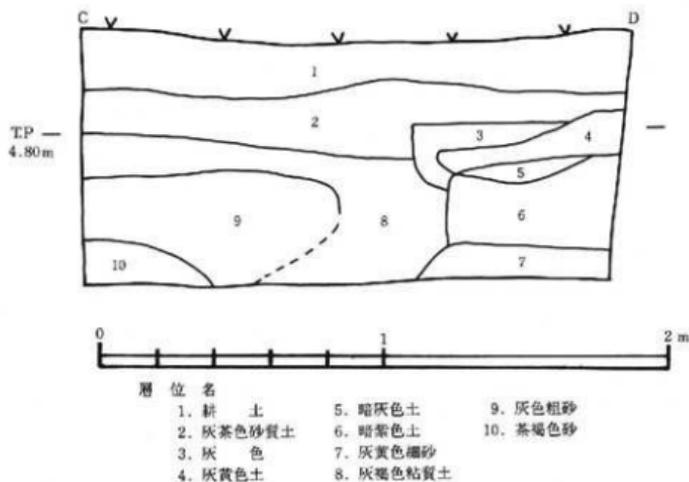
第28圖 東雲遺跡掘立柱建物

溝 南西隅に存在する規模は、調査区外におよぶため不明である。下部の灰色砂より土師器の完
 型品(4)の他破片が出土した。古墳時代前期に属する遺構である。

以上の遺構の他にピット77内から須恵器が1点(8)検出された。



第29図 東雲遺跡河川状遺構断面図



第30図 東雲遺跡溝断面図

表5 ビット一覧表

ビット 番号	規 模 直径(cm)・深さ(cm)	埋 土	出土遺物	備 考
1	30・10	灰茶色土		掘立柱建物
2	27・13	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径10cm
3	40×32・16	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
4	32・13	暗褐色土	土師器片	
5	19・9	灰茶色土	土師器片	
6	35・13	灰茶色土	土師器片	
7	38×28・28	灰茶色土 (灰色多い)	土師器片・須恵器片	
8	26・22	灰茶色土		
9	40・20	灰茶色土	土師器片	柱直径16cm
10	48×30・15	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
11	38×32・15	灰茶色土	土師器片	柱直径12cm
12	34×32・16	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径15cm
13	44×40・23	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径16cm
14	47×32・23	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径17cm
15	24×20・22	灰茶色土		
16	26・24	灰茶色土	土師器片・須恵器片 杯身Ⅱ・6	
17	20・?	?		
18	20・13	灰茶色土	土師器片	
19	46×40・25	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
20	22×20・25	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱14×18 掘立柱建物
21	36×28・25	灰茶色土	土師器片	
22	24×20・14	灰茶色土		
23	32・9	灰茶色土	土師器片	
24	50・19	灰茶色土	土師器片	柱直径20cm 掘立柱建物
25	25×22・12	灰茶色土		柱直径13cm
26	30×22・20	灰茶色土		
27	48×42・13	灰茶色土	土師器片	柱直径8cm 掘立柱建物
28	14・15	灰茶色土	土師器片	

ピット 番号	規 模 直径(cm)・深さ(cm)	埋 土	出土遺物	備 考
29	38×32・29	灰茶色土	土師器片	柱直径12cm
30	22・8	灰茶色土	土師器片	
31	22×17・8	灰茶色土		
32	22×18・6	灰茶色土	土師器片	P33より新しい
33	27×18・27	灰茶色土	土師器片・須恵器片	P32より古い
34	52×44・13	灰茶色土	土師器片	柱直径16cm 掘立柱建物
35	32×26・14	灰茶色土		
36	43×36・20	灰茶色土	土師器片・須恵器片 杯身II・6	柱直径6cm 掘立柱建物
37	36×28・16	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径14cm 掘立柱建物
38	20・9	灰茶色土	土師器片	
39	30・5			柱直径15cm
40	28×22・7	灰茶色土		
41	26×23・24	灰茶色土		
42	50×46・31	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
43	38×40・23	灰茶色土	土師器片・須恵器片 杯身II・3	P44との新旧不明
44	40・23	灰茶色土	土師器片・須恵器片	P44、P45、P46の順に古い
45	33・20	灰茶色土	土師器片	柱直径14cm
46	40×26・13	灰茶色土	土師器片	
47	50×40・9	灰茶色土	土師器片	P48、P49、P47の順に古い
48	30・7	灰茶色土	土師器片	
49	38×32・7	灰茶色土	土師器片・須恵器片	掘立柱建物
50	34×30・6	灰茶色土		
51	33・19	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径10cm
52	42×40・10	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
53	40×30・10	灰茶色土		柱直径15cm
54	58×48・13	暗褐色土		柱直径16cm
55	56×40・8	暗褐色土		くぼみのようなピット
56	42・23	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径16cm

ピット 番 号	規 模 直径(cm)・深さ(cm)	規 土	出土遺物	備 考
57	24・22	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径12cm
58	38×36・18	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径14cm
59	60・13	灰茶色土	土師器片	柱直径20cm
60	50×46・26	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
61	44×34・13	灰茶色土	土師器片・須恵器片	P62より古い
62	33・17	灰茶色土	土師器片	柱直径18cm 獨立柱建物
63	60×42・28	灰茶色土	土師器片・須恵器片	P64より新しい 柱直径20cm
64	78×40・27	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径19cm 獨立柱建物
65	38・17	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径20cm
66	46×36・24	灰茶色土	土師器片・須恵器片	P68、P67、P66の順に古い
67	40×30・20	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
68	30・18	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
69	92×65・30	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
70	14・9	灰茶色土		
71	39・18	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
72	38×26・9	灰茶色土	土師器片	P72、P73の前後関係不明 柱直径14cm
73	24・7	灰茶色土		
74	32・24	灰茶色土		柱直径19cm
75	30×28・13	灰茶色土		
76	48×32・18	灰茶色土	土師器片	柱直径12cm 獨立柱建物
77	65×61・20	灰茶色土 (砂っぽい)	土師器片・須恵器片 杯身Ⅳ・2	
78	22×18・12	灰茶色土	土師器片	柱直径16×12 獨立柱建物
79	46×38・33	灰茶色土	土師器片	P80より新しい 柱直径26×22
80	50×42・37	灰茶色土	土師器片	柱直径24×20
81	48×38・49	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
82	26・12	灰茶色土		柱直径12cm
83	48・11	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
84	28×22・9	灰茶色土	土師器片	柱直径10cm

ビット 番号	規 直径(cm)・深さ(cm)	標 土	出土遺物	備 考
85	32・13	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
86	17・16	灰茶色土	土師器片	
87	42×30・23	灰茶色上	土師器片・須恵器片	柱直径14×16 掘立柱建物
88	32・6	灰茶色上	土師器片・須恵器片	
89	52×43・37	灰茶色上	土師器片・須恵器片	
90	48×38・17	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径13×10 掘立柱建物
91	20・11	灰茶色上	土師器片	柱直径12cm
92	42×36・21	灰茶色上	土師器片	柱直径12cm
93	298×194・81	黄色土混り灰茶色土 (雑品)	土師器片・須恵器片 磁器片	現代
94	74・23	灰茶色土	土師器片	
95	58×40・15	灰茶色土		
96	33・10	灰茶色上		核直径13cm 掘立柱建物
97	28×26・16	灰茶色土	土師器片	柱直径10cm
98	52×22・14	灰茶色土	土師器片	柱直径14cm 掘立柱建物
99	50・27	灰茶色上	土師器片・須恵器片 杯身Ⅱ・2	P100より新しい
100	50・24	灰茶色上	土師器片・須恵器片	
101	52・30	灰茶色上	土師器片・須恵器片	P102より古い
102	50・29	灰茶色土	土師器片・須恵器片	
103	26×24・10	灰茶色上		
104	16×14・7	灰茶色上		
105	44×40・30	灰茶色土	土師器片	掘立柱建物
106	32・31	灰色土		柱直径15cm
107	26×22・20	灰茶色土	土師器片	
108	33×28・20	灰茶色土	土師器片	柱直径10cm
109	44×33・11	灰茶色土	土師器片・須恵器片	柱直径16cm
110	37×33・12	灰茶色土	土師器片	柱直径13cm 掘立柱建物
111	22×18・2	灰茶色土		
112	22×20・17	灰茶色土		

ピット 番 号	規 模 直径(cm)・深さ(cm)	埋 土	出 土 遺 物	備 考
113	32×28・ 6	灰 茶 色 土		
114	34×30・ 17	灰 茶 色 土	土師器片・須恵器片	
115	26×24・ 26	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径12cm
116	29×26・ 4	灰 茶 色 土	土師器片	
117	41×34・ 16	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径13cm
118	×30・ 11	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径18×16
119	28×24・ 15	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径12cm
120	26×24・ 22	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径12cm
121	24×20・ 9	灰 茶 色 土	土師器片	
122	30・ 18	灰 色 土	土師器片・須恵器片	
123	32×28・ 20	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径12×10
124	32・ 20	暗 褐 色 土	土師器片・須恵器片	柱直径13cm
125	36×32・ 26	暗 褐 色 土	土師器片	柱直径12cm
126	32×28・ 18	灰 色 土	土師器片	
127	32×28・ 19	暗 褐 色 土	土師器片	
128	52×36・ 17	暗 褐 色 土	土師器片・須恵器片	
129	39×36・ 13	灰 茶 色 土	土師器片	
130	16・ 3	灰 茶 色 土		
131	38×35・ 30	灰 色 土	土師器片・須恵器片	
132	70×45・ 30	暗 褐 色 土	土師器片・須恵器片	
133	18・ 7	暗 褐 色 土		
134		灰 茶 色 土	土師器片	

遺物

(1) 土師器

壺(4)

「く」字状にやや内湾する口縁部で、端部は内側に肥厚し、端面は内傾する平坦面をもつ。胴部は球形で、底部も丸味をおびるが、やや平面をなす。胴部外面頸部以下はハケ目、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部内面の上半部はへら削り、下部は指押え痕がみられる。布留式に属するものである。

(2) 須恵器

杯蓋(5)

天井部と口縁部は間の稜は完全に退化し大型である。やや丸味をもつ天井部から内湾しながら口縁部に至り、口縁端部は丸い。天井部外面は程度は回転へら削りで、他は内・外面共回転ナデ調整である。色調は乳茶色で、焼成はやや軟である。ロクロ回転方向は左回りである。II型式3段階のものである。

杯蓋(6)

偏平な宝珠つまみをもち、天井部はゆるやかに内湾して口縁部に至る。端部は丸く、内側より下方にのびる比較的長いかえりをもつ。天井部外面は回転へら削りであり、他は内外面共回転ナデ調整である。天井部上面に直線で長さ約3.5cmのほぼ平行な2本のへら記号がみられる。色調は灰色で、焼成は良好である。ロクロの回転方向は右回りである。III型式1段階のものである。

杯身(7)

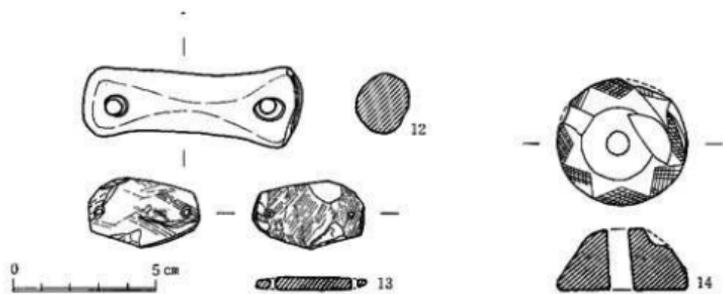
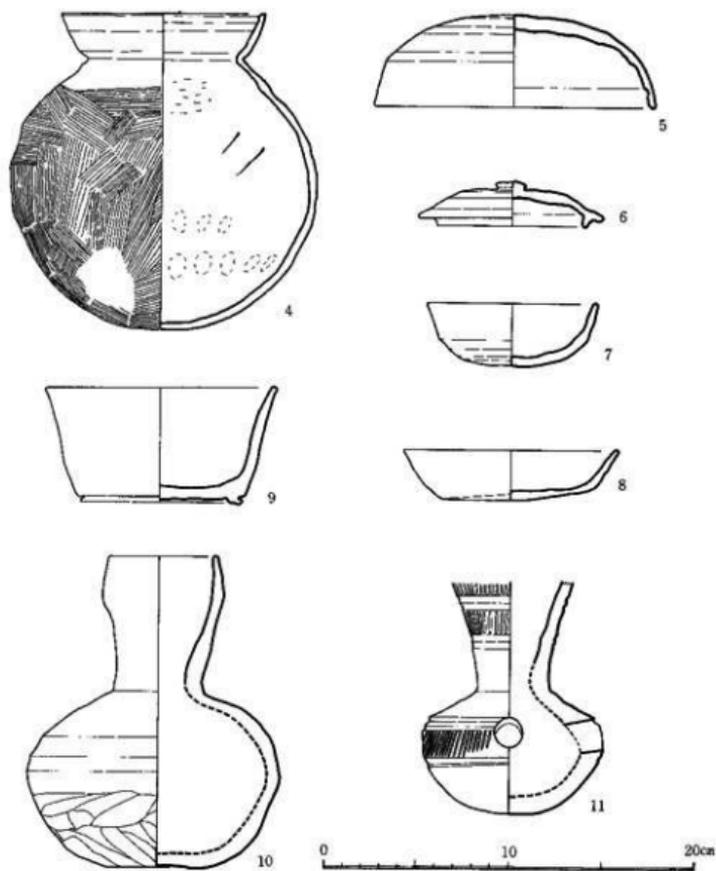
底部は偏平な球形で、口縁部が直立気味にたちあがり、端部は丸い。底部外面は回転へら削り、他は内外面共回転ナデ調整である。色調は灰色で、焼成は良好である。ロクロの回転方向は右回りである。III型式1段階のものである。

杯身(8)

平らな底部から直線的に外上方にのび、口縁部に至る。口縁端部は丸い。底部外面は右方向の回転へら削りが見られ、他は内・外面共回転ナデ調整である。色調は乳灰色で、焼成は良好である。III型式2段階のものである。

杯身(9)

高台付の杯身である。底部は平らで口縁部は外上方へ内湾気味にのび、途中から外湾気味にのびる。口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字型に広がり貼り付けてある。内外面共回転ナデ調整を



第31圖 東雲遺跡出土遺物

施してある。色調は灰色で、焼成は良好である。III型式2段階のものである。

長頸壺(1)

底部は平らで少し窪み、手持ちへう削りである。胴部は偏平な球形で肩がやや張り、回転ナデ調整が施される。口頸部は直立気味に外反し、上部で内弯して口縁部に至る。端部は丸い。内外面共回転ナデ調整である。胴部と口頸部の間に接合した痕跡がみられる。ロクロの回転方向は右回りである。色調は灰色で、焼成は良好である。II型式4段階のものである。

甕(1)

底部は偏平に近い球形で、胴部には上方に2本の又、下方に1本の沈線を有し、その間には刺突文が施されている。又、直径約1.5cmの円孔を1つ有する。底部はナデ調整、胴部は回転ナデ調整である。口頸部の基部は細くラッパ状に外反し、上方に2本の沈線、下方にも2本の沈線があり、その間には刺突文が施されている。口頸部上半部は欠損している。内外面共回転ナデ調整である。色調は灰色で、焼成は良好である。II型式5段階のものである。

(3) 土製品

土鍾(1)

棒状を呈し両端は指押えにより偏平となし、直径約7mmの孔を穿ち、体部は指押えとナデで整える。長さ7.6cm、体部長径2.1cm、短径1.8cmを測る。

双孔円板(1)

緑色片岩で、長軸3.9cm、短軸2.3cm、厚さ4mmを測る。孔は周縁より3mm～4mmの位置に直径約2mmに穿たれ、両者間は2.6cmである。両面ともにスリキズが見られる。円板とは言いえないほど非対称形であり、他製品を再加工して作られたものであろう。

紡錘車(1)

滑石製である。円錐台形を呈し、中央部に円孔が穿たれている。側面は底部近くで約4mm、錘直になり、斜面には除刻による斜格子の入った縄文が、周囲に8箇所みられる。色調は淡青色である。上面の直径2.6cm、下面の直径4.5cm、高さ2.2cmで、孔径は上部8mm、下部9mmを測る。河川内上層出土である。

3 まとめ

今回の調査においても前回調査(昭和52年度)と同様多数のピットを検出したが、南東部分では遺構は稀薄になっているので、集落のほぼ限界を示しているのであろう。さて、今回の調査で目立った遺構として掘立柱建物が見られる。6間×4間の比較的大規模なもので、その面積は

約47㎡である。南辺桁行の中央部でピット1個分見られず、精査したのであるが、検出されなかった。当初からピットは存在しなかったものと思われる。高床式の建物であるならば、周囲全てに柱穴が掘られるであろう。だとすれば、この建物は平地式となる可能性がある。多分その部分に出入口の施設があって、平入りと考えられる。時期は埋土内出土の遺物より古墳時代としたい。しかし、前回の調査においては掘立柱建物は中世に属するものと考えられたが、今回の調査では掘立柱建物をはじめ、他のピットにおいても中世遺物は検出されていない。今後に問題を残すものである。南西隅で砂の堆積層が見られ、布留式に属する土師器が検出された。溝状のようであるが、調査範囲をこえるので断言できない。前回の調査で溝2としたやはり規模不明の遺構が検出され、出土遺物も布留式であった。その位置から判断して同一遺構であると思われる。

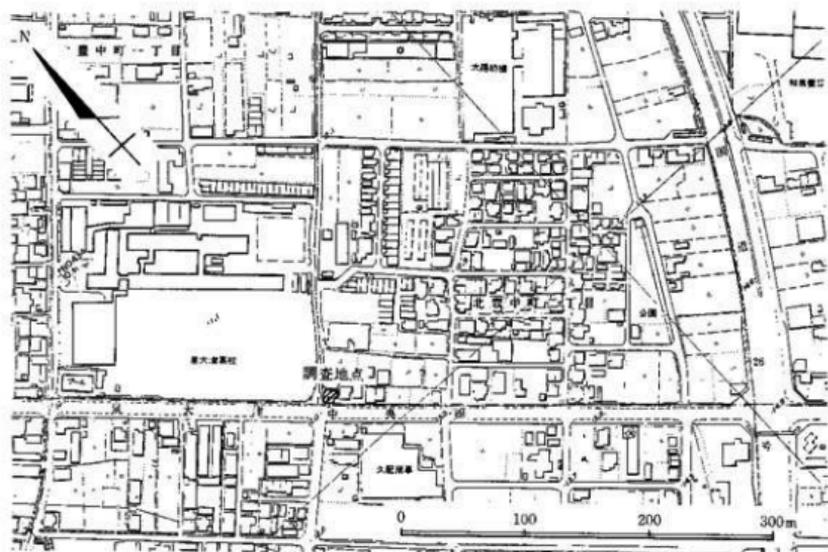
河川内から、完型品もしくはそれに近い須恵器と共に、変形の双孔円板や紡錘車が発見された。双孔円板は鏡の模造品と考えられ、装飾のある滑石の紡錘車は古墳の副葬品にも見られ、これらの組み合わせから、この河川において、何らかの祭祀が行なわれたと推定される。又この双孔円板には直線的な加工面が2辺に見られることから、たとえば石剣のような形状の一部を利用して製作されたようである。

大ピット93は、現代の遺構である。調査中にたまたま通りかかった人によると、以前電力会社に勤めていたということで、電柱を建てる時には、人力でこのような穴を掘ったとのことである。現在は機械力による。ほぼ電柱の太さの穿孔なので、大ピット98のような掘り方が既にわからなくなってきたのである。

第5節 七ノ坪遺跡

1 調査に至る経過

七ノ坪遺跡は、北豊中町一帯に所在する弥生時代から古墳時代・中世に属する遺跡である。昭和32年冬、府立泉大津高校北門前の水田、通称「七ノ坪」において地下げ工事が行われた際、同校地歴部員によって土師器片が採集され、「七ノ坪遺跡」と名付けられた。昭和43年以来同校校舎の増改築工事に先立ち、府教育委員会の実施した発掘調査や、同地歴部による試掘調査、又、周辺部における、府・市教委の調査で、弥生時代後期の溝・水田跡、古墳時代初期の溝・水田跡の他に4世紀前半の土壇、4世紀後半の住居跡・方形周溝墓、5世紀前半の住居跡・木棺直葬墓・墓址、中世の土壇・溝等が発見され、複合遺跡であることが知られている。今回はこの遺跡の南端部において、事務所兼住宅が計画され、これに先立ち調査を実施したものである。



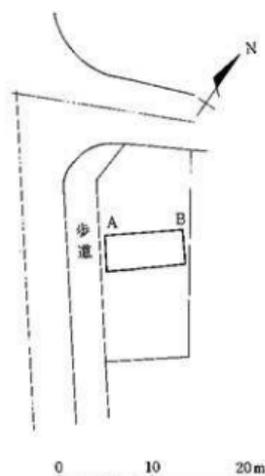
第32図 七ノ坪遺跡調査地点図

2 調査結果(北豊中町2丁目464-6、-8、
-10、-13 調査番号8603)

住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は220.60㎡である。

敷地内のほぼ中央に、市道泉大津中央線と直角方向で幅約3m90、深さ約1m10、長さ約9mの規模で重機によって基礎掘削がなされていた。人力により壁面を削り断面観察を実施した。両端各々2m余りは以前の雑物の基礎掘削により攪乱を受けていた。

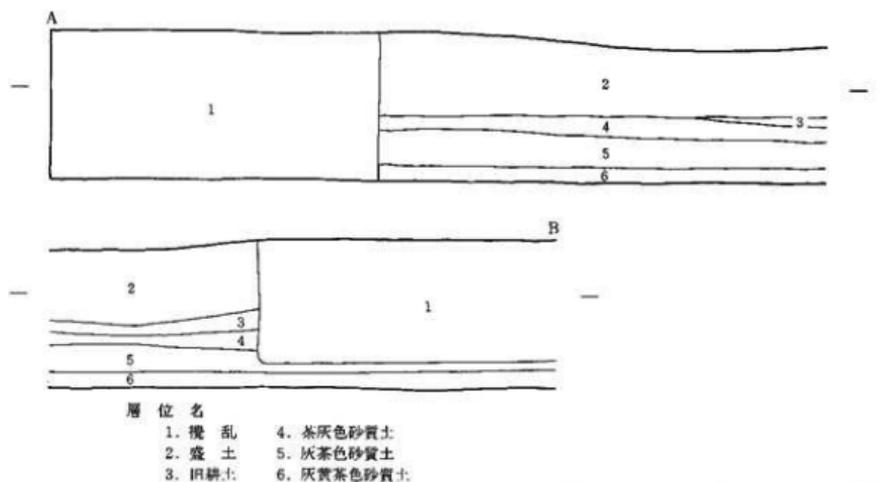
層序は上部より盛土約60cm、耕土約10cm、但し南西に行くにしたがって徐々に薄くなりやがて見られなくなる。茶灰色砂質土約5~15cm、灰茶色砂質土約15~25cm、灰黄色砂質土10cm以上と続き、単純な地積の様相を呈している。



第33図 七ノ坪遺跡掘削位置図

遺構は発見できなかったが、灰茶色砂質土層及び、灰黄色砂質土層に磨耗した土師器の小片が1点づつ検出された。

以上の調査結果から遺構は存在しないものと判断し写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第34図 七ノ坪遺跡調査塚断面図

3 まとめ

当該地は豊中遺跡との接点付近にあたり、既往の調査結果からいずれの遺跡にも遺構の稀薄となる部分であると考えられ、又地層もしっかりとした地盤でないため、集落を形成する適地であるとは言えない。今回の調査においても以上のことを証明する結果となった。ただし集落をとりまく地形環境が不明であるので、今後も根気強く調査を続ける必要があろう。

第6節 虫取遺跡

1 調査に至る経過

泉大津市虫取の市立南公民館を中心に、半径約800mの範囲内で、土師器片や須恵器片が散布しており、虫取遺跡として知られていた。昭和53年、宅地開発に先立って発掘調査が、その費用を原因者負担として、府教育委員会によってなされた。初めての本格的な調査によるメスが入れられたのである。その結果、縄文晩期の土器片をはじめ、弥生土器畿内第Ⅰ様式新段階の土器を包含する土域、6世紀後半及び10世紀後半の掘立柱建物等が発見され、弥生時代前期、古墳時代前期、平安時代中頃に集落が存在していたことを明らかにした。

その後、昭和54年に、この遺跡内に所在していた諸瀬池が、小学校（現楠小学校）建設のため埋め立てられることになった。池内の堤防沿いに須恵器片等が散布していたので、市教育委員会で、池内の発掘調査を実施したのであるが、遺構は池底の改修等により削平されているようで、残念ながら発見されなかった。



第35図 虫取遺跡調査地点図

昭和58年には、学校用地となった旧諸瀬池の堤防をコンクリート擁壁にし、その一部を壊して市道が設けられるので、それらの工事に先立って発掘調査を実施した結果、人工と思われる溝が検出され、その溝内から、滋賀里式土器や長原式土器と共伴して、弥生土器第I様式新段階の土器^⑧が出し、縄文時代と弥生時代の接点を明らかにする好資料が得られた。

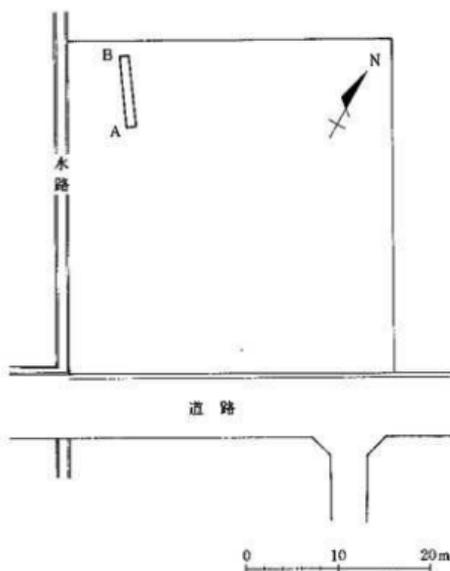
2 調査結果(板原207 調査番号8608)

事務所・倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は967㎡である。

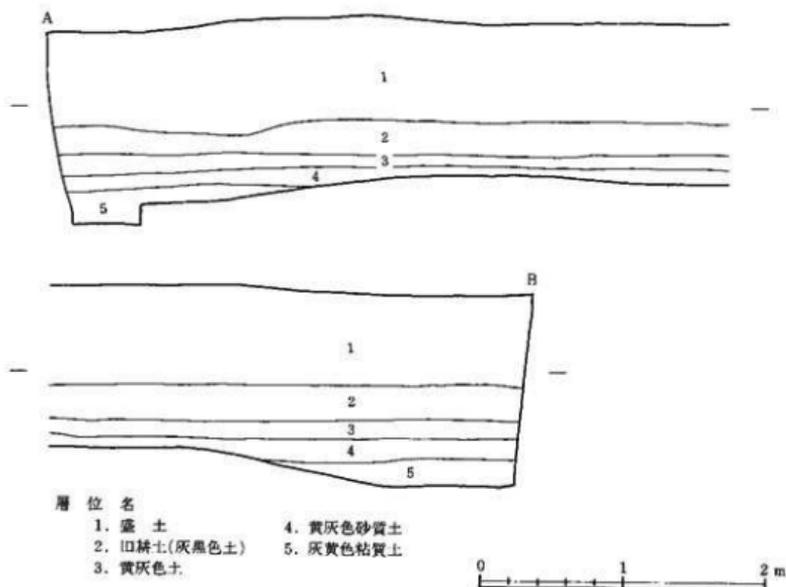
敷地内のはは南西寄りに、幅約1m、深さ約1m40、長さ約8m20の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より、盛土約70cm、耕土約24cm、黄灰色土約10cm、黄灰色砂質土約10~14cm、灰黄色粘質土約24cmで黄色粘質土層となる。

遺構は発見できなかったが、黄灰色土から土師器片、灰黄色粘質土から瓦器片を検出したが、いずれも小破片であるため図示し得ない。これらの遺物は、包含する層が堆積する過程で混入したものであろう。既往調査結果とも考え合わせて、当該地には遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成して、調査は終了とした。



第36図 虫取遺跡掘削位置図



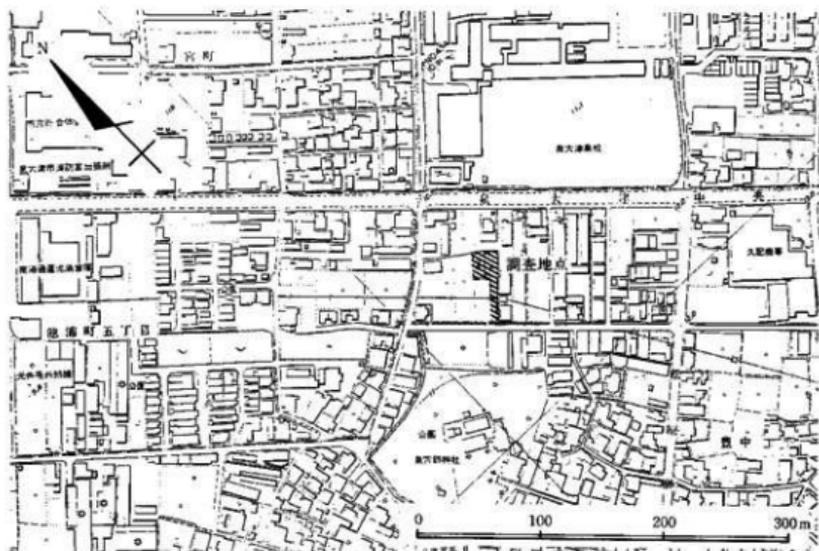
第37図 虫取遺跡調査坑断面図

第7節 穴師遺跡

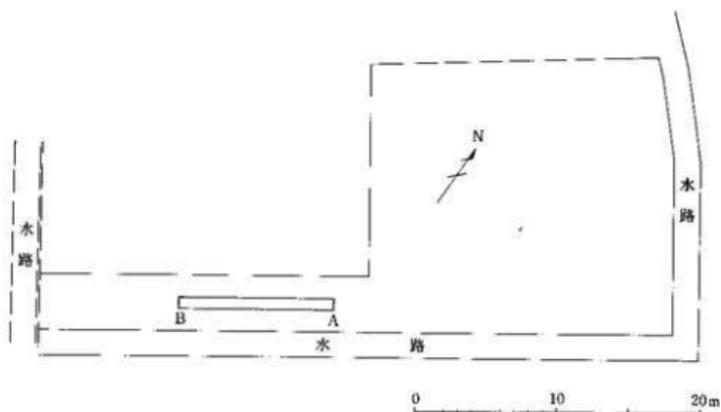
1 調査に至る経過

穴師遺跡は、泉穴師神社を中心に直径約200mの範囲の遺跡である。神社境内の豊中公園や、付近の水田には土師器片・須恵器片・瓦器片等が散布しているため、周知の遺跡とされている。しかし、具体的なことは何一つ知られておらず、その実態は不明である。泉穴師神社は、白鳳元年(672年)の創建とされ、和泉五社の第二社で延喜式内社に列し、人々の崇敬を集めている。このことから周辺部は古くから開けていたことは明らかで、発見遺物から古墳時代以降の集落が存在していたものと思われる。

今回この遺跡の北東部において住宅建設が計画され、これに先立ち調査を実施したものである。



第38図 穴師遺跡調査地点図



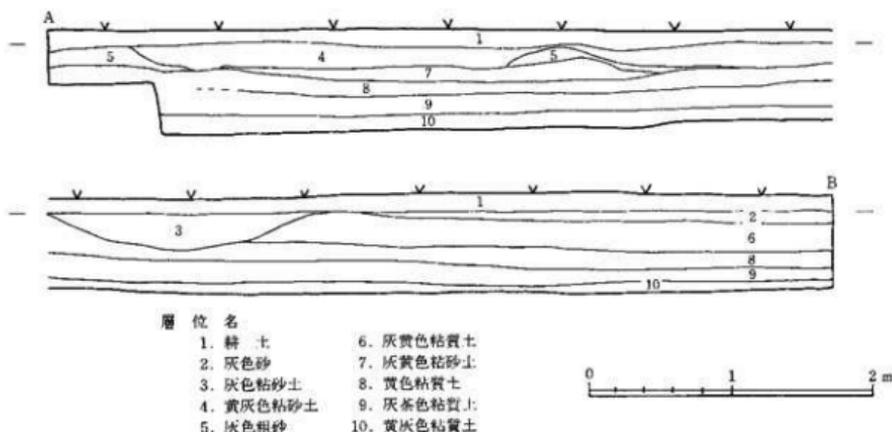
第39図 穴師遺跡掘削位置図

2 調査結果(豊中668-2、669-2 調査番号8606)

住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は547.74㎡である。

敷地内の南側に、幅約80cm、深さ約70cm、長さ約11mの規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より耕土約10~16cm、黄灰色粘砂土約10~18cmで、北側では灰色粗砂12cmが南に向かって徐々に薄くなり黄灰色粘砂土の下へもぐり、やがて見られなくなる。そして北端から3m付近で再び最大厚10cmで堆積しているが、5m付近でなくなっている。南側では耕土の次には、灰色砂5~10cm、その下に灰黄色粘質土約30~40cmが存在する。以上の層の下に北側で灰黄色粘砂土約10cmが間層として見られるが全体に黄色粘質土10~15cmが存在し、下層は灰茶色粘質土7~15cm、黄灰色粘質土15cm以上となる。なお中央部では耕土下に灰色粘砂土が最大厚25cmで黄色粘質土層まで達しており、土師器片と9世紀代の須恵器片が出土したが、いずれも小破片であるため図示しえない。遺構は発見できなかったので、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了した。



第40図 穴師遺跡調査坑断面図

第8節 池上・曾根遺跡

1 調査に至る経過

池上・曾根遺跡は、和泉市池上町に於て、水田や、その土を使用した土堀に、石器や土器片が見られることで、古く明治時代から有識者には知られていた。又、戦後、市営住宅の建設や府営水道の水道管埋設工事により、緊急調査が行なわれ、住居址の存在から集落跡であることが報告された。しかし本格的な調査が実施されたのは、昭和44年～46年にかけての第2版和国道建設に先立っての発掘調査からである。その成果は、かねて考えられていた弥生集落の内容をはるかに上まわり、その認識を書き換える必要を生じせしめたものである。それは、弥生時代前期に於ける集落の生成から発展への過程、及び古墳時代集落への移行の様子を明らかにするものである。その後の調査により、遺跡は和泉市のみでなく、泉大津市曾根町にまで伸びていることがわかり、その重要性から、昭和51年4月26日、国の史跡に指定され、泉大津市、和泉市により、保存のため徐々に公有地化が進められている。又、その周辺部に於ても、府教育委員会をはじめ両市教育委員会に於て、毎年発掘調査が実施され、遺跡の様子がより明らかにされつつある。



第41図 池上・曾根遺跡調査地点図

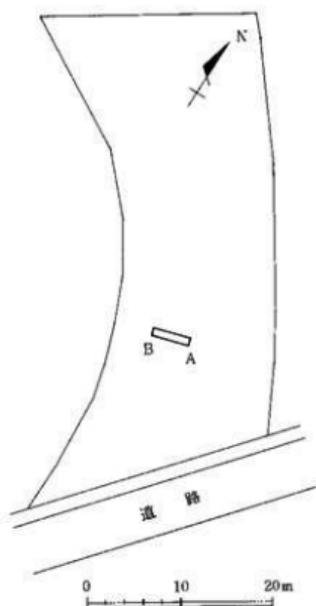
2 調査結果(曾根町1丁目208-1 調査番号8702)

共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は932.01㎡である。

敷地内の南東寄りに、幅約80cm、深さ約1m10、長さ約3m70の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り断面観察を実施した。

層序は上部より耕土約10~15cm、灰茶色砂質土約14~20cm、黄茶色粘砂土約5cm、灰褐色砂質土約20~40cmと続く。この灰褐色砂質土層の上面は同一レベルであるが下面是西へ行くにしたがってレベルを下げ、その下部には褐灰色粘砂が約20cmで西へ徐々に薄くなって消滅する。そして茶褐色砂礫約10cm、暗黒色粘質土30cm以上と続く。砂礫層から湧水がおり、掘削は続行し難く、暗黒色粘質土が見られたので掘削はこれまでとした。

遺構は発見できなかったが、灰褐色砂質土から須恵器器台脚部片が1点発見された。基礎掘削は耕土下までの設計であるため、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第42図 池上・曾根遺跡掘削位置図



第43図 池上・曾根遺跡調査坑断面図

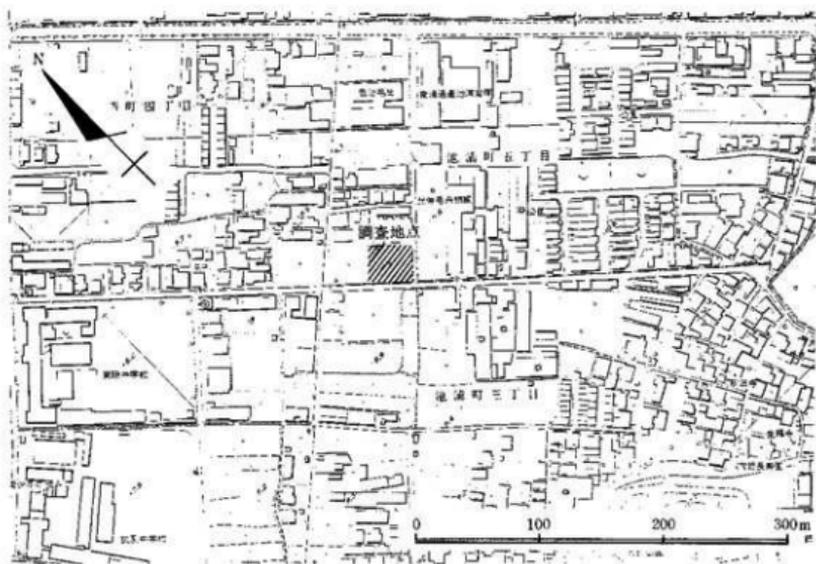
3 まとめ

今回の地点は、市道を挟んで南東側が昭和51年史跡に指定されていること、又南側隣接地の調査結果及び、更に南側の府道松之浜曾根線の調査で古墳時代の遺構面が検出されていることから基礎掘削深度は浅いが遺構の存在する範囲確認の為調査を実施した。その結果、遺構の存在を証明できるものは得られなかったが、調査面積が狭いこともあるので、早急な結論は危険であるため保留として今後の調査結果を待つこととしたい。

第9節 池浦遺跡

1 調査に至る経過

弥生時代前期中段階の集落として、池浦遺跡は知られているが、存続期間は短かく、前期の間に衰退してしまうようである。その規模もさほど大きくはなく、現在の泉大津市立病院東側から



第44図 池浦遺跡調査地点図

東へ500mの範囲にかけてのみ、その時期の遺構・遺物が検出される。しかし人々が生活を営んだ住居の跡は、今のところ発見されておらず、集落を画すると思われる人工のV字溝及び、断定はできないが、柱穴と思われるピットが確認されているのみである。その次の遺物は古墳時代で、既往の調査によると、砂利層や低湿地が確認されている。又、付近の水田には、須恵器や土師器の破片が散布し、その範囲は凡そ800m×400mと広範囲にわたる。

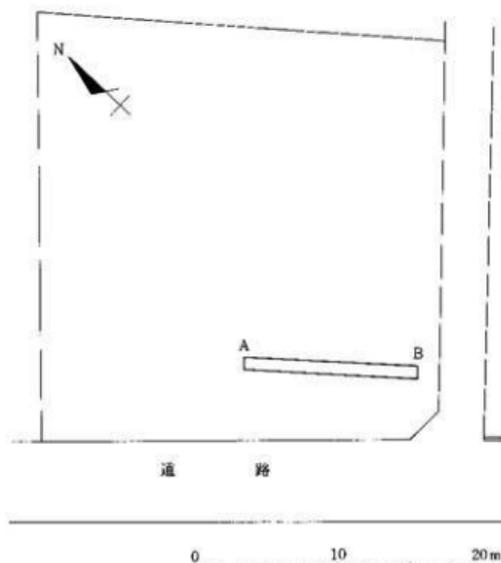
2 調査結果(池浦町5丁目207-1 調査番号8605)

住宅及び倉庫建設に先立つ調査である。敷地面積は825.47㎡である。

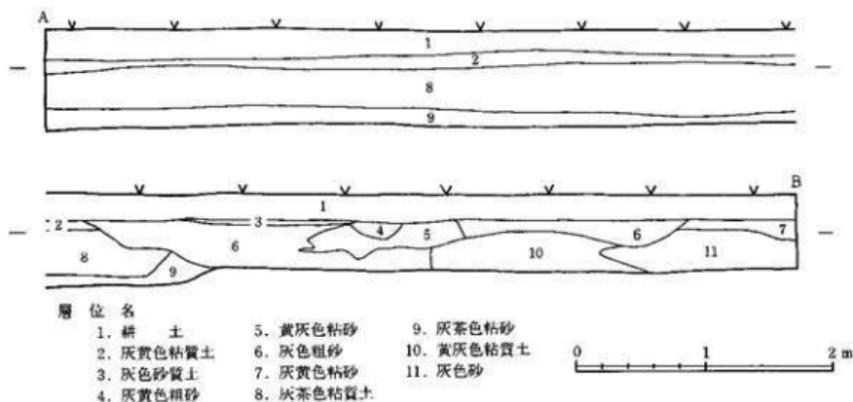
敷地内の南西寄りに市道に沿って、幅約90cm、深さ約70cm、長さ約11m70の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は耕土約20cmでその下は、調査坑のほぼ中央部より北西側で灰黄色粘質土約4～8cm、灰茶色粘質土約26～44cm、灰茶色粘砂20cm以上と単純な地積に対して南東側では第46図に示すように、砂及び粘砂が複雑な地積の仕方を呈している。遺構は発見できなかったが北西寄りの灰茶色粘砂層中に土師器片が1片検出された。小片で器種不明のうえ図示しえない。

以上の調査結果から遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第45図 池浦遺跡掘削位置図



第46図 池浦遺跡調査地断面図

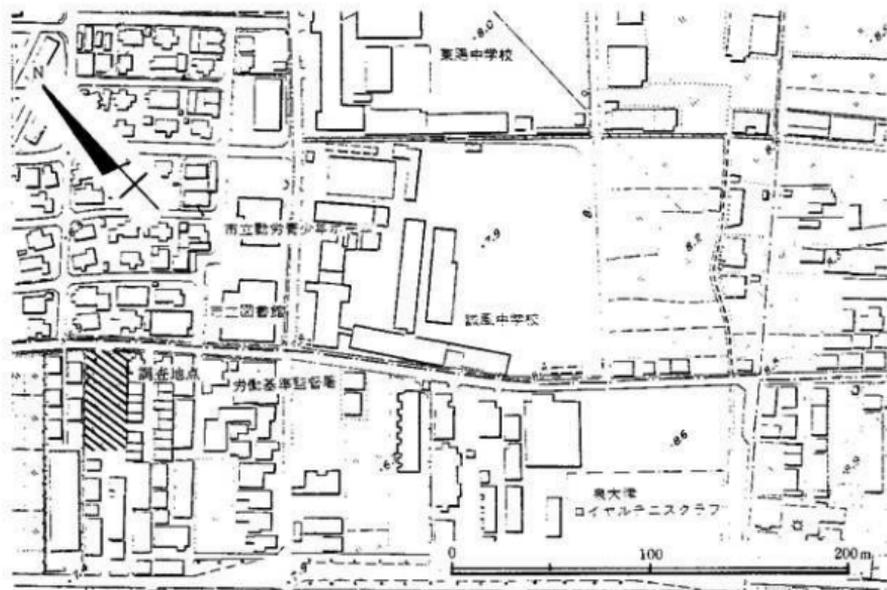
3 まとめ

当該地は昭和59年度に報告した^⑤池浦遺跡の調査地点より、西へ約70mの地点である。その時の調査では、南北方向に流路を持つ溝が検出されており、出土遺物から弥生時代中期に属するものと考えられた。今回、南西部において見られた砂及び粘砂の堆積層は先の溝とは直接関係はないものと思われるが、同一のわずかな埋積谷に位置する部分である。旧地形を復元する上で好資料を得られたとあって良いだろう。

第10節 遺跡範囲外試掘調査

1 調査に至る経過

泉大津市池浦町1丁目438番地において、共同住宅建設の計画がおこり、同土地所有者中川サト子氏から泉大津市開発指導要綱第4条第1項の規定により、事前協議の申し出がなされた。市教育委員会では検討の結果、当該地は池浦遺跡と東雲遺跡から等距離で、2遺跡の周辺部にあたり、基礎掘削も1m20と深いため試掘調査が必要であると判断した。そして中川氏との協議により、今回の事前試掘調査を実施することとなった。



第47図 遺跡範囲外試掘調査地点図

2 調査結果(池浦町1丁目438 調査番号8604)

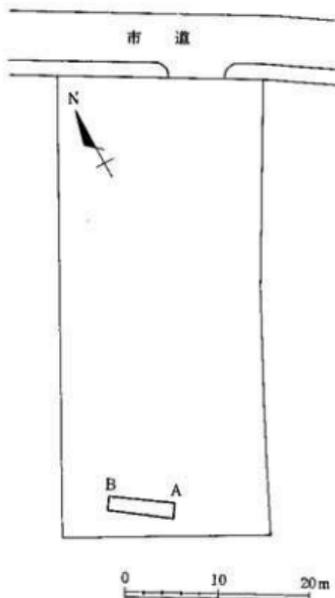
共同住宅建設に先立つ調査である。敷地面積は99
1.88㎡である。

当該地は、従来アスファルトを貼って駐車場として使われていた。この敷地の南西寄りに、幅約1 m 60、深さ約1 m 30、長さ約6 m 90の規模の調査坑を重機により掘削し、その後人力により壁面を削り、断面観察を実施した。

層序は上部より、アスファルト6 cm、盛土約70 cm、耕土約10～16 cm、茶灰色粘砂土(床土)約6 cm、灰黄色粘質土約10 cm、黄灰色粘質土約6～16 cm、灰褐色粘質土約8～22 cm、黄灰色砂質土となる。灰黄色粘質土は南東側へ行くに従って徐々に薄くなり、やがて見られなくなる。

遺構は確認できなかったが、黄灰色粘質土層中に磨耗した土師器片が少量発見された。いずれも小破片であるため図示しえない。

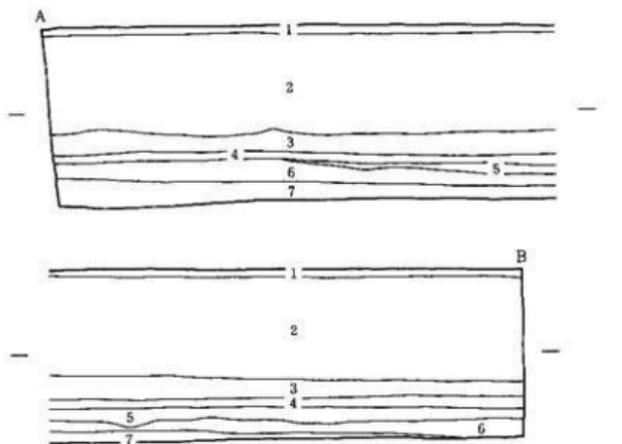
当該地には遺構は存在しないものと判断し、写真撮影及び断面実測図を作成して調査は終了とした。



第48図 掘削位置図

3 まとめ

当該地は、弥生時代前期の集落遺跡である。池浦遺跡の中心部と思われる地点より西南西の方向へ約300 m、又、古墳時代と中世の集落遺跡である東雲遺跡の中心部から南方向へ約250 mの地点にあたる部分である。今回の調査によって土師器が検出されたものの、いずれも小破片で著しく磨耗しており、出土層とも考え合わせると、2次堆積によるものと思われる。上記2遺跡は既往の調査により、現在の遺跡範囲よりも小さくなる見込であるため、当該部分にはいずれの遺跡範囲もおよばないと判断される。



- 層位名
- | | |
|-----------|-----------|
| 1. アスファルト | 5. 灰黄色粘質土 |
| 2. 盛土 | 6. 黄灰色粘質土 |
| 3. 耕土 | 7. 灰褐色粘質土 |
| 4. 茶灰色粘砂土 | |



第49図 調査地断面図

引用文献

- ① 高石市教育委員会 『大園遺跡発掘調査概要』 1976・3
- ② 和泉市史編纂委員会 『和泉市史』第一巻 1965・10
- ③ 和気遺跡調査会 『和気』 1979・3
- ④ 大阪府教育委員会 『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報——板原遺跡——』 1980・3
- ⑤ 豊中・古池遺跡調査会 『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのIII』 1976・3
- ⑥ 泉大津市教育委員会 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3
- ⑦ (財)大阪府埋蔵文化財協会 『仏並遺跡』 1986・3
- ⑧ 第2阪和国道内遺跡調査会 『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』 1971・9
- ⑨ 甲元真之「弥生人の食料」 『季刊考古学』第14号 1986・2
- ⑩ 泉大津市教育委員会 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2』 1984・3
- ⑪ 泉大津市教育委員会 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3
- ⑫ 泉大津高校地歴部 『和泉の古代遺跡』和泉考古学第5号 1961・3
- ⑬ 大阪府「弥生文化と農耕」 『大阪府史』第一巻 1983・3
- ⑭ 調査時点では要池遺跡であったが、現在は古池遺跡として遺跡分布図に記載されている。
- ⑮ 岸和田市教育委員会 『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』 1965
- ⑯ 東永裕雄・島田暎・森浩一 『和泉黄金塚古墳』 1954・3
- ⑰ 大阪府教育委員会 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』 1974・3
- ⑱ 大阪府教育委員会 『七ノ坪遺跡発掘調査概要III』 1984・3
- ⑲ 泉大津市教育委員会 『豊中遺跡発掘調査概要III』 1979・3
- ⑳ 和泉市史編纂委員会 『和泉市史』第一巻 1965・10
- ㉑ 大阪府教育委員会 『要池遺跡発掘調査概要I』 1975・3
- ㉒ 大阪府教育委員会 『第2阪和国道内遺跡発掘調査概報——板原遺跡——』 1980・3
- ㉓ 豊中・古池遺跡調査会 『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのIII』 1976・3
- ㉔ 泉大津市教育委員会 『豊中遺跡発掘調査概報III』 1979・3
- ㉕ 和気遺跡調査会 『和気』 1979・3
- ㉖ 和気遺跡調査会 『和気II』 1981・9
- ㉗ 泉大津市教育委員会 『豊中遺跡発掘調査概要II』 1978・3
- ㉘ 泉大津市教育委員会 『豊中遺跡発掘調査概要III』 1979・3
- ㉙ 高石市教育委員会 『大園遺跡発掘調査概要』 1976・3
- ㉚ 大阪府教育委員会 『大園遺跡発掘調査概要V』 1981・3
- ㉛ 大阪府教育委員会 『大園遺跡発掘調査概要VI』 1981・3
- ㉜ 中村浩氏編年による。以下同じ。
- ㉝ 泉大津市教育委員会 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3
- ㉞ 大阪府教育委員会 石神怡氏のご教示による。
- ㉟ 大阪府教育委員会 『池上遺跡発掘調査概要V』 1975・3
- ㊱ 泉大津市教育委員会 『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3』 1985・3

表6 遺物観察表

豊中遺跡第3地点

No	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
1	31.4	(残存高) 19	2~5mmの石粒を多く含む。 乳茶色	口縁部外面ヘラナデ 胴部外面ヘラナデ 内面ナデ	茶灰色砂	焼成：良好 質：土師質 羽蓋：1号并戸
2	29.4	(残存高) 28.2	1mm~2mmの石粒を多く含む。 乳茶色	外面ヘラ削り後ナデ 内面ハケ目	茶灰色砂	焼成：良好 質：土師質 羽蓋：2号并戸

大園遺跡

No	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
3	—	—	1mmぐらいの石粒を少量含む。 灰色	外面底部回転ヘラ削り。 外面体部下回転ナデ。 内面回転ナデ、ヘラ回転ナデ。	トレンチ 黄色粘質土上面。	焼成：良好 質：硬質 須恵器 杯身

東雲遺跡

No	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
4	11.6	2.5	3mmぐらいの石粒一つ含む、砂まじり。 乳灰色	内外面回転ナデ。 底部は回転ヘラキリ。	灰茶色土	焼成：良好 質：硬質 須恵器：杯身
5	9.2	3.7	黒点を少々含む。 0.2mm~0.5mmの石粒を少々含む。 灰色	内外面回転ナデ。 底部は回転ヘラ削り。	河川状遺構 青灰色砂	焼成：良好 質：硬質 須恵器：杯身
6	9.7	2.4	黒点を少々含む。 0.2mm~0.5mmの石粒を少々含む。 灰色	外面つまみ回転ナデ。 外面上半分回転ヘラ削り。 外面下半分回転ナデ。 内面回転ナデ。	河川状遺構 青灰色砂	焼成：良好 質：硬質 須恵器：杯蓋
7	15.2	5.1	1mmぐらいの石粒を少々含む。 白っぽい茶色	外面回転ヘラ削り。 口縁高外面回転ナデ。 内面回転ナデ。	河川状遺構 青灰色砂	焼成：やや不良 質：軟質 須恵器：杯蓋
8	12.5	6.3	石粒を少々含む。 (8mm1コ、3mm少し) 灰色	内外面回転ナデ。 高台径は回転ヘラキリの 上から回転ナデ。	河川状遺構 茶灰色砂質土	焼成：良好 質：硬質 須恵器：杯身
9	6	17	精良 灰色	外面体部下より底部はヘラ削り。 内外面回転ナデ。	河川状遺構 青灰色砂	焼成：良好 質：硬質 須恵器：長頸瓶
10	6.6	12.7	精良 灰色	底部外面、体部下半分ナデ。 体部上外面より、内面は回転ナデ。 体部上外面に衝刺突文。	河川状遺構 青灰色砂	焼成：良好 質：硬質 須恵器：盃
11	11	17.3	0.3mm~1mm程度の砂粒を少々含む。 薄茶色	外面ハケ目。 口縁部外面ココナデ。 内面上半分ヘラ削り後ナデ。 口縁部内面ココナデ。 内面下半分指押え底。	南西側溝 灰色砂	焼成：良好 土師器：袋(布留式)

No	法 量	材 質	調 整・加 工	出土場所(層)	備 考
12	長さ7.6cm 直径 長 2.1cm 短 1.8cm	砂粒を含む 乳白色	指押え、ナ字	南西部溝 灰褐色土	土師製棒状土師 貫通孔直径7mm
13	長さ 3.9cm×2.3cm 厚さ 4mm	緑色片岩	両面および側面研磨	河川状遺構 明灰色砂質土	双孔円板 貫通孔直径2mm
14	直径 上 2.6cm 下 4.5cm 高さ 2.2cm	滑石 乳灰色	研磨	灰黄色土	紡錘形 貫通孔直径8mm~9mm

圖 版



豊中遺跡第1地点調査城



豊中遺跡第2地点調査城



豊中遺跡第3地点調査坑



豊中遺跡第3地点2号井戸



豊中遺跡第4 地点調査坑



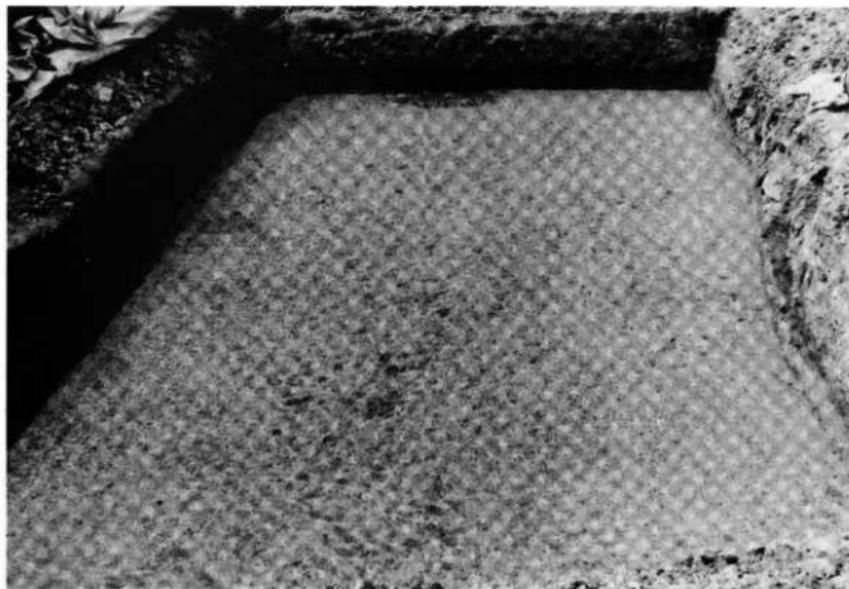
板原遺跡第1 地点調査坑



板原遺跡第2地点調査坑



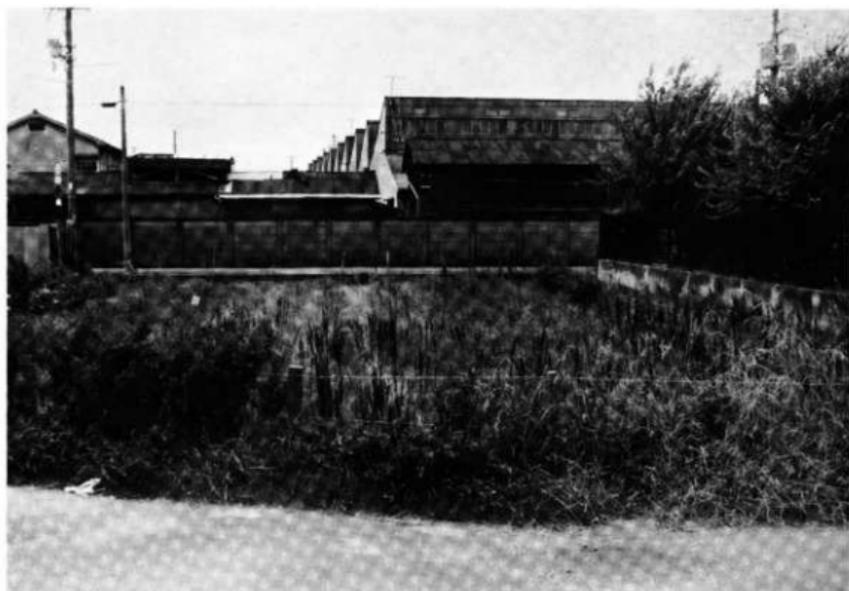
板原遺跡第3地点調査坑



大園遺跡第1地点調査城



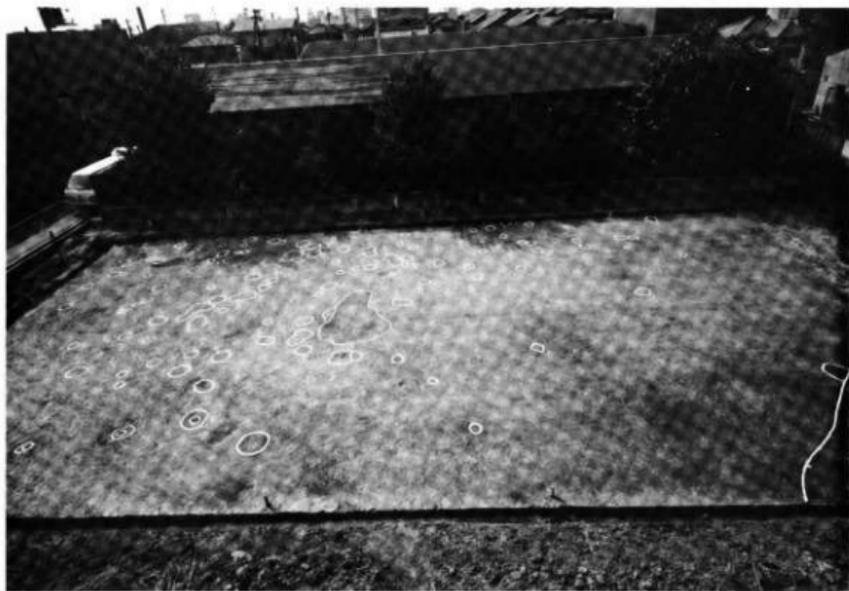
大園遺跡第2地点調査城



東雲遺跡調査前



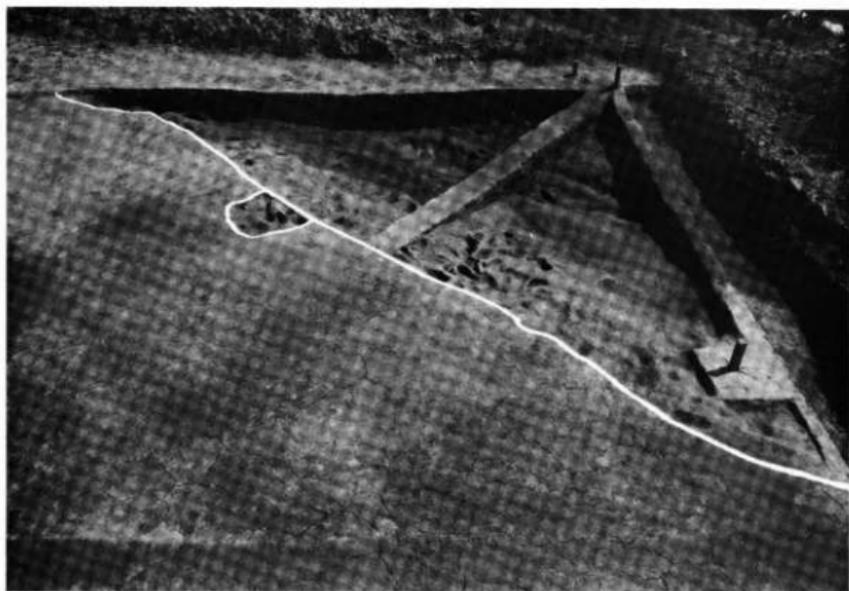
東雲遺跡調査風景



東雲遺跡ビット掘り下げ前



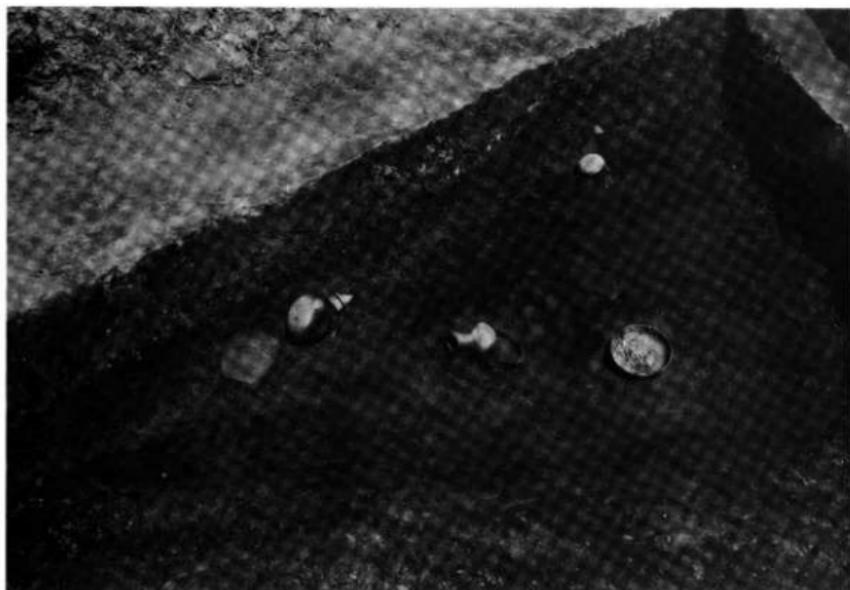
東雲遺跡ビット掘り下げ後



東雲遺跡河川状遺構



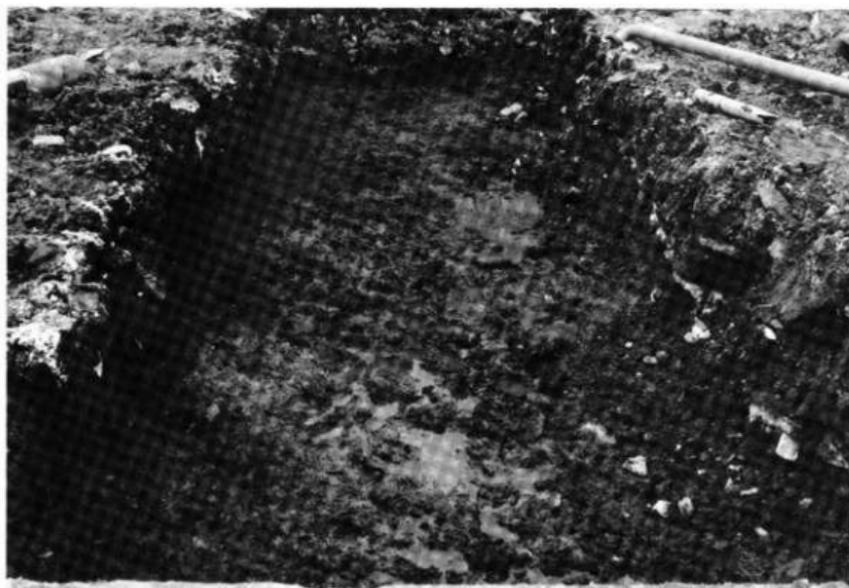
東雲遺跡掘立柱建物跡



東雲遺跡河川状遺構内遺物出土状況



東雲遺跡ビット77遺物出土状況



七ノ坪遺跡調査坑



虫取遺跡調査坑



穴師遺跡調査坑



池上・曾根遺跡調査坑



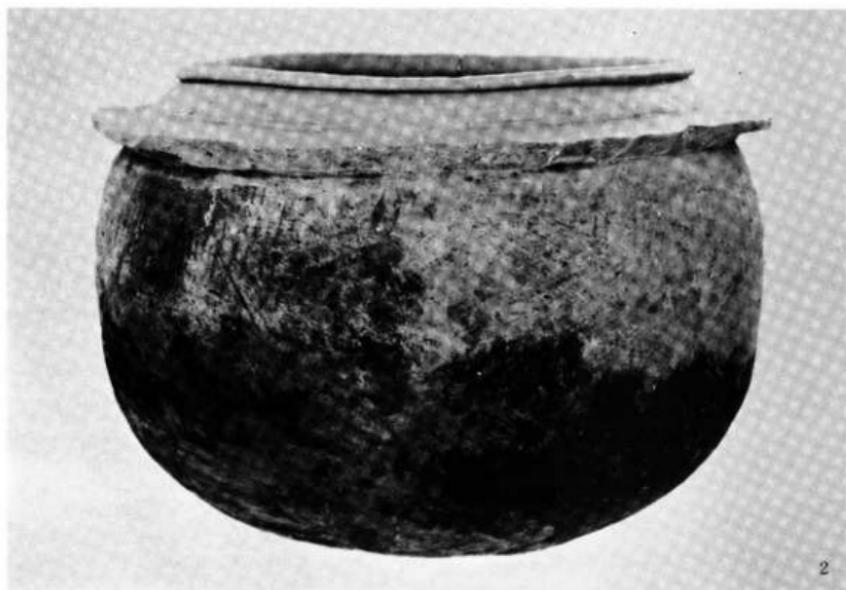
池浦遺跡調査坑



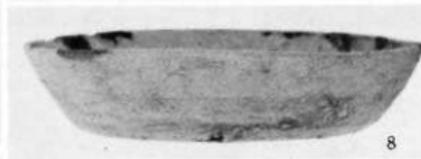
遺跡範囲外試掘調査坑



豊中遺跡第3地点1号井戸杓



豊中遺跡第3地点2号井戸杓



泉大津市文化財調査報告13
泉大津市埋藏文化財発掘調査概報 5

1987年3月

発行	泉大津市教育委員会
編集	社会教育課 泉大津市東雲町9番12号
印刷	和泉出版印刷株式会社 泉大津市東豊中1-6-2

